

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告108

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書

- 貸倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 -

2022

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告108

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書

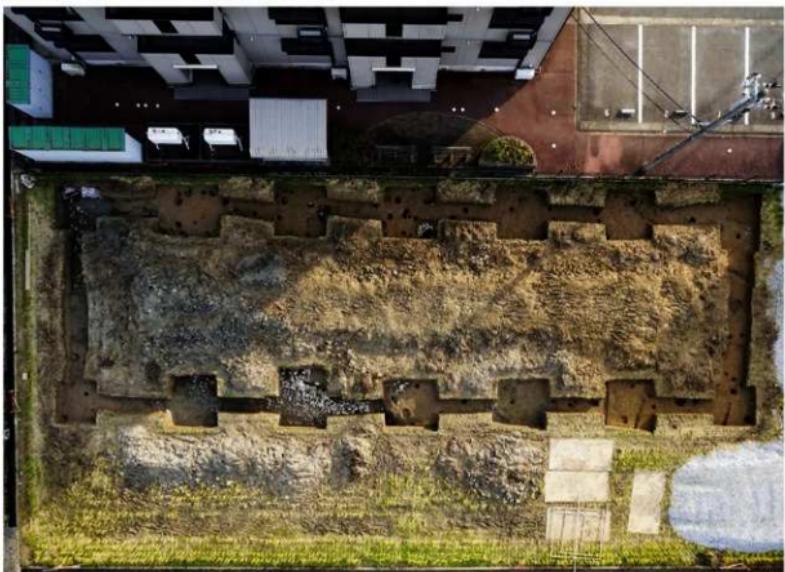
－貨倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2022

富山市教育委員会



調査地区全景（遺構検出、空撮、北西から）



調査地区全景（完掘、空撮、下が北）



土師器碗・皿



施釉陶器

例　　言

- 1 本書は、富山県富山市黒崎に所在する黒崎種田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、貸倉庫建設に伴う発掘調査である。
- 3 調査は、原因者から有限会社毛野考古学研究所富山支所に発注し、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと実施した。
- 4 本書で報告する調査の概要は次のとおりである。

調査面積	111.7 m ²
発掘作業期間	令和3年11月8日～12月3日
整理作業期間	令和3年12月6日～令和4年6月30日
監理担当者	鹿島昌也（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 専門学芸員） 細辻嘉門（富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 専門学芸員）
発掘作業担当者	常深 尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）
整理作業担当者	常深 尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）
- 5 調査及び出土品整理にあたり、次の方々よりご協力・ご助言を賜った。また、地元黒崎地区のご協力を得た。記して謝意を表します（五十音順、敬称略）
照田清光、原建設、黒崎地区
- 6 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を第4章に掲載した。
- 7 出土品及び図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 8 本書の執筆は、第1章・第2章を細辻、第3章・第5章を常深が行い、編集は常深が行った。文責は文末に記した。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系である。挿図の方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1995年後期版』に拠る。
- 3 遺構表記は、流路：NR、溝：SD、井戸跡：SE、土坑：SK、ピット：SP を用いた。
- 4 写真的縮尺は不統一である。
- 5 遺物実測図の縮尺は、原則1/3である。
- 6 挿図中の網掛けは、次のとおりである。

遺物  赤彩・漆付着  内黒・炭化範囲  墨書・油煙

- 7 図1・24は富山市基本図、図2は国土地理院発行2万5千分1地形図をもとに作成した。

目 次

例言・凡例

第1章 調査の経過.....	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	1
第3節 発掘調査日誌抄	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果.....	7
第1節 調査の方法	7
第2節 層 序	7
第3節 遺 構	8
1 自然流路	8
2 構	11
3 井戸跡	12
4 士坑	12
5 ピット	14

第4節 遺 物	16
1 試掘調査出土遺物	16
2 自然流路出土遺物	18
3 構出土遺物	22
4 井戸跡出土遺物	22
5 土坑出土遺物	23
6 ピット出土遺物	23
7 確認面出土遺物	26
8 表土出土遺物	26
第4章 自然科学分析.....	34
第1節 放射性炭素年代測定	34
第5章 総 括	36
引用・参考文献	38
写真図版	
報告書抄録	

捕 図

図1 黒崎種田遺跡調査区位置図	3
図2 周辺の遺跡分布図	6
図3 基本断面	7
図4 調査区全体図	8
図5 遗構位置図(1)	9
図6 遗構位置図(2)	10
図7 NR01遺構図	11
図8 SD遺構図	12
図9 SE遺構図	13
図10 SK遺構図	13
図11 SP遺構図	15
図12 試掘調査出土遺物 (1)	16

目 次

図13 試掘調査出土遺物(2)	17
図14 自然流路出土遺物(1)	19
図15 自然流路出土遺物(2)	20
図16 自然流路出土遺物(3)	21
図17 構出土遺物	22
図18 井戸跡出土遺物	22
図19 土坑出土遺物	24
図20 ピット出土遺物	25
図21 確認面出土遺物	27
図22 表土出土遺物	27
図23 層年較正結果	35
図24 NR01 及び平成17年度調査 S06	37

表 目 次

表1 遺構一覧表	14
表2 遺物観察表(1)	28
表3 遺物観察表(2)	29
表4 遺物観察表(3)	30

表5 遺物観察表(4)	31
表6 遺物観察表(5)	32
表7 遺物観察表(6)	33
表8 放射性炭素年代測定結果	35

写 真 図 版 目 次

写真図版1 遺構 調査地区全景(遺構検出、空堀、北西から)	
調査地区全景(完掘、空堀、下が北)	
写真図版2 遺物 土師器碗、盤/施釉陶器	
写真図版1 遺構(1) 調査地区全景(遺構検出、空堀、西から)	
調査地区全景(完掘、空堀、東から)	
写真図版2 遺構(2) 調査地区東側全景(南西から)	
調査地区西側全景(南東から)	
写真図版3 遺構(3) NR01 完掘(北西から)	
NR01 完掘(北東から)	
写真図版4 遺構(4) NR01 完掘(北東から)	
NR01 繩出土状況(北東から)	
写真図版5 遺構(5) SE34 上層(南西から)	
SE34 完掘(南から)	
SE82 上層(北から)	
SE82 石組(北から)	
SE82 振り方(南から)	
SE85(北西から)	
SE85 檜出状況(東から)	
SK33 完掘(西から)	

写真図版6 遺構(6) SD59 完掘(北西から)	
SD83 完掘(東から)	
SD86 完掘(東から)	
SD91 完掘(南から)	
SD96 完掘(南から)	
SD97 完掘(北から)	
SP29 遺物出土状況(南から)	
SK100 遺物出土状況(北から)	
写真図版7 遺物(1) 試掘調査出土遺物	
写真図版8 遺物(2) 試掘調査出土遺物、NR01出土遺物	
写真図版9 遺物(3) NR01出土遺物	
写真図版10 遺物(4) SE34・82 出土遺物、SD86・97 出土遺物	
SK23-41・50-85・92~95-100出土遺物	
SP05・29・35 出土遺物	
写真図版11 遺物(5) NR01出土遺物	
SP03-07・12-15・25・30-31・35-60・75-78・81-87・89-103・170出土遺物	
確認面出土羽口、表土出土遺物	
製埴土器・輪羽口・土種・木製品・金属製品	
写真図版12 遺物(6)	

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

黒崎種田遺跡（遺跡番号 2010550）は、昭和 63 年度～平成 3 年度に富山市教育委員会（以下：市教委）が実施した市内遺跡分布調査により新たに確認した遺跡である。平成 5 年に市教委が刊行した『富山市遺跡地図（改訂版）』には遺跡番号 201480 として登載・周知され、平成 25 年度刊行の『富山市遺跡地図』で、現在の遺跡番号となった。

本遺跡内では毎年敷度にわたって試掘調査及び発掘調査が行われており、その調査成果を踏まえ範囲の見直しを行い、現在の埋蔵文化財包蔵面積は約 396,000 m²である。

令和 3 年 6 月 29 日、富山市黒崎地内において、原因者から貸倉庫建設工事について埋蔵文化財包蔵地の所在確認依頼があった。開発予定地全域 885 m²（図 1・令和 3 年度調査区）が黒崎種田遺跡に含まれていたため、令和 3 年 9 月 15 日に市教委で試掘調査を実施した。幅約 1 m の試掘トレチを 3 カ所設定し、対象地の中央部分 631 m²で、奈良・平安時代の溝・土坑・ピットを確認し、土師器・須恵器・古代製塙土器・近代磁器が出土した。

埋蔵文化財の所在を確認したため、試掘調査の結果に基づき、市教委と原因者が埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。協議の結果、開発計画のうち、建物の基礎と地中梁部分 111.7 m²については工事の掘削計画が遺構検出面よりも深く、埋蔵文化財を現地で保存できないため、発掘調査による記録保存を行い、その他の工事については遺跡を現地で保存することで合意した。

以上を踏まえ、原因者から令和 3 年 10 月 4 日付けで「貸倉庫建築に伴う埋蔵文化財調査について」の依頼書が提出された。発掘調査は民間発掘調査期間に委託して実施することとし、令和 3 年 11 月 5 日付けで原因者、有限会社毛野考古学研究所富山支所、市教委の三者で埋蔵文化財発掘調査に関する協定を締結した。

文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、原因者から令和 3 年 10 月 4 日付けで市教委へ提出され、市教委の副申を付けて令和 3 年 10 月 5 日付け埋文第 100 号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、市教委から令和 3 年 11 月 15 日付け埋文第 100 号により富山県教育委員会へ提出した。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘調査は原因者から有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託業務を発注し、埋蔵文化財センター職員が発掘調査の監理にあたった。

調査着手前の令和 3 年 10 月 20 日に三者立会いの下、調査範囲について確認を行った。発掘調査は同年 11 月 8 日から 12 月 3 日まで行った。表土掘削はバックホウを用いて埋蔵文化財センター職員立会いのもと 11 月 8 日に行なった。排土は発掘調査区外の敷地内に横置きした。11 月 10 日から人力による遺物包含層掘削・遺構検出作業を開始した。

試掘調査結果では、奈良・平安時代の遺構が想定されており、掘削を開始すると、試掘調査の結果のとおり、調査区全体で奈良・平安時代の遺物が出土した。遺物包含層は調査区の一部に拡がることがわかった。遺物包含層の遺物は、世界測地系第Ⅶ系座標に基づき 10 m グリッドを設定してグリッド毎に取り上げた。表土掘削、遺物包含層掘削が完了したところから遺構検出作業を行った。遺構検出作業で奈良・平安時代の遺構と自然流路が分布することがわかった。遺構検出作業完了後、UAV を

使用して11月16日に全景撮影を行い、引き続き遺構掘削作業を行った。掘削作業と並行して隨時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。11月30日には遺構掘削を終え、ラジコンヘリコプターを使用して全景写真を撮影した。12月1日埋蔵文化財センター所長による現地作業終了確認を行った。

調査後、現地埋め戻しは行わず、令和3年12月3日現地作業完了と撤収を確認し、現地調査を完了し現地を引き渡した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後令和3年12月6日から有限会社毛野考古学研究所富山支所で実施した。整理作業は、遺構出土遺物を優先して抽出し、接合・図化した。遺物写真はフルサイズデジタル一眼レフカメラを使用し、図化したものを優先して撮影した。これらの作業と並行して原稿作成を行い、令和4年6月30日に本書を刊行し、業務を完了した。

第3節 発掘調査日誌抄

令和3年

- 10月 20日 調査区位置出し確認（原建設、
毛野考古学研究所、埋蔵文化財センター）
11月 8日～11月 9日 調査機材・資材搬入
同日 パックホウによる表土掘削作業着手
11月 10日 遺構検出作業着手
　　調査区西側遺構検出作業
11月 11日 調査区中央部遺構検出作業
11月 12日 調査区東側遺構検出作業
11月 15日 奈良・平安時代の遺構と旧河道
　　検出
11月 16日 遺構検出作業完了、遺構検出状況
　　全景空中写真撮影
同日 遺構掘削作業着手、写真撮影
11月 17日 調査区南側遺構掘削完了、断面図
　　作成
11月 18日 調査区北西側遺構掘削完了、平面
　　図作成
11月 19日 旧河道跡以外の遺構掘削作業完了、
　　写真撮影、図化作業
11月 19日～11月 29日
　　旧河道跡人力掘削作業、遺物取り上げ
11月 30日 掘削完了状況全景空中写真撮影
12月 1日 埋蔵文化財センター所長現地調査
　　終了確認
12月 3日 調査機材・資材搬出、現地調査終了

（細辻）



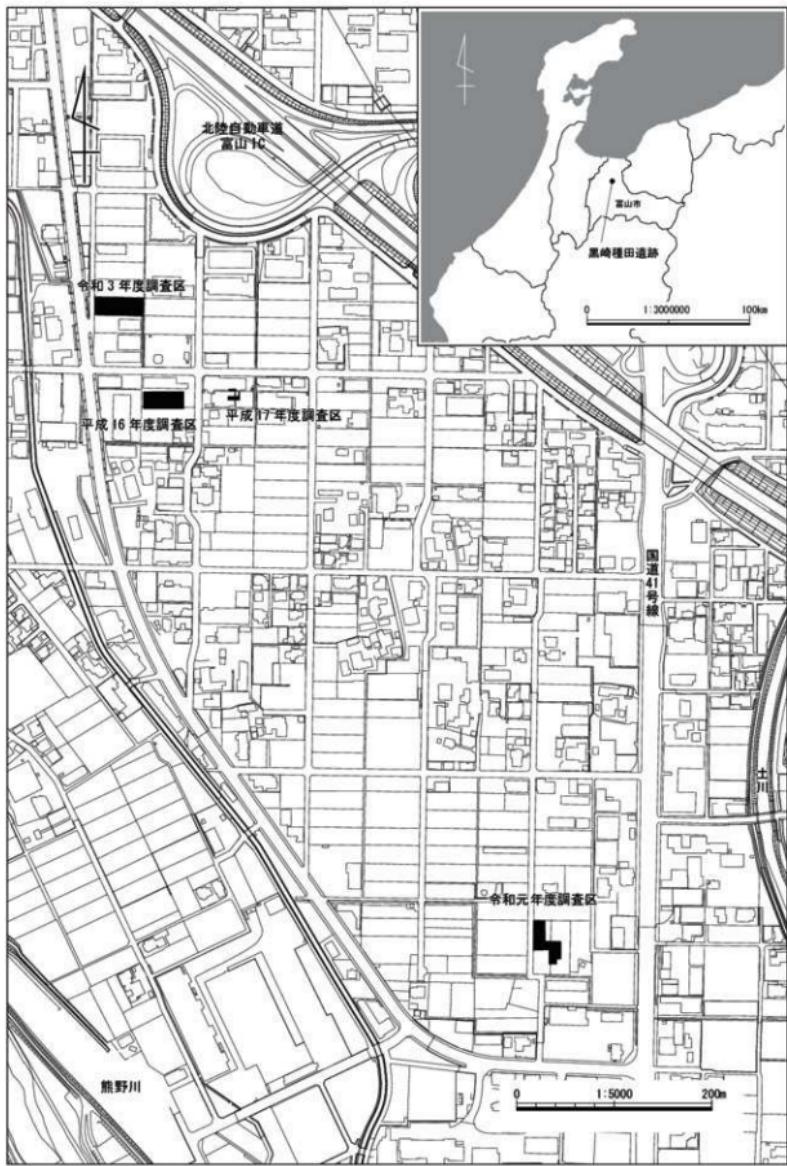


図1 黒崎種田遺跡調査区位置図 (S=1/5000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山市は富山県のほぼ中央部に位置する。富山市の地勢は大まかに山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しており、海岸から標高3,000m級の高山地帯まで変化に富む。

富山平野は富山県中央部の大部分を占めており、北は富山湾と面し、東端は早月川扇状地、西端は県のほぼ中央を二分する呉羽丘陵に、南は飛騨山地から続く丘陵に接する。神通川・常願寺川とその支流が形成した扇状地や低位面・氾濫平野の発達が顕著である。

黒崎種田遺跡(図2・1)は、富山市中心部から南約5kmの富山市南部、黒崎・黒瀬・八日町・蛭川地内に所在し、東西700m、南北1.1kmの範囲に広がる古墳、奈良・平安、中世、近世の集落である。

今回調査区の所在する黒崎地区は、富山湾から12km内陸に入った神通川支流熊野川右岸に位置する。神通川とその支流熊野川や土川の堆積によって形成された緩扇状地上に立地する(図2)。現在の地形は南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。

神通川は、岐阜県の川上岳に源を発した渓谷が富山、岐阜県境で高原川と合流して、富山市鷹津付近で富山平野に出る。山麓山腹に段丘平野や扇状地を形成しながら北流し、富山市鶴島付近で井田川と合流して富山湾に注ぐ。富山市中心部では現在はほぼ真っ直ぐに北流して富山湾に注いでいるが、かつては現在の県立富山中部高校の辺りで東に曲がり、富山城の北を東向きに流れ、現在の赤江町の辺りで大きく西に曲がって蛇行していた。この蛇行部分でしばしば水害がおこり、その対策として明治時代に蛇行部分を短絡する分水路を開削し(馳越線)、一定量を超える洪水は分水路に流れるようにした。やがて元の本流には水が流れなくなり、馳越線が本流となった。

熊野川は、富山市有峰の西笠山に源を発し、高頭山のふもと三枚滝を経て北流し、富山市文珠寺付近で西に流れを変え、富山平野に出る。富山市東福沢で黒川と合流し、富山市布瀬付近で神通川と合流する。急流河川のため、古くから多雨時期には豪雨による災害が発生し、治水事業として昭和59(1984)年に熊野川ダムが完成した(北日本新聞社1994)。流域では試掘調査等で過去の洪水堆積層が見られ、たびたび水害に見舞われたことがわかる。

今回調査区は黒崎地区のほぼ中央、遺跡の西中部に位置する。調査前の現況は水田である。調査区付近の標高は20.0m前後である。調査区の周辺一帯は、かつては水田が広がる農村地域であったが、都市化が進み、住宅やアパートが立ち並んでいる。調査区の西隣を主要地方道富山環状線が南北に通り、1.4km北で国道359号と交差する。調査区のすぐ北には北陸自動車道富山インターチェンジが所在し、北陸自動車道が南東～北西に貫く。調査区の東600mには国道41号が南北に通り、1.6km北東の掛尾地内で国道359号と交差する。富山インターチェンジや国道沿線には、富山市中心部と郊外への交通アクセスが良いため、大型店舗や工場、倉庫が建ち並び、富山市の物流や工業生産の中心を形成する。

第2節 歴史的環境(図2)

黒崎種田遺跡と黒崎地区周辺一帯の遺跡について概観する。

本遺跡では、開発の進展に伴って、ほぼ毎年試掘調査や工事立会が行われ、古墳時代から近世までの遺構・遺物を確認し、本遺跡の主要な時期は、奈良・平安時代と中世であることが分かっている。

本遺跡内の発掘調査は今回調査を含めると3度実施している。平成16・17年度には今回調査区の南東100mにある工場建設と駐車場造成に先立つ発掘調査を実施した。平成16年度調査区では中世の掘立柱建物、竪穴状土坑、井戸等を検出した。出土遺物には、灯明皿、青磁の碗・盤、青白磁の

梅瓶など一般庶民とは異なる特定階層の生活にかかわるものがみられる。平成17年度調査区では、古代の堅穴建物や大溝等を検出した（市教委2005）。令和元年度には、今回調査区の南800mにある県医師会館建築に先立つ発掘調査で13～15世紀代の屋敷跡・堅穴状遺構・馬小屋・井戸・石室などを検出した。井戸の中には「井戸終い祭祀」が行われていたものがある。出土遺物の中には金付き土器があり、県内初の出土例である。この地は蜷川氏一族の拠点であり、蜷川氏が関連する有力武士の屋敷跡が想定される（市教委2020）。

本遺跡周辺では、現在までに旧石器時代の遺跡は確認していない。

本遺跡周辺では縄文時代の遺跡も分布は希薄で、現在までに遺跡として確認できるのは縄文時代晚期に入つてからである。本遺跡の南東にある吉岡遺跡（17）では、宅地造成に伴う発掘調査で縄文時代晚期後葉の土坑・ピット・石組炉を検出し、縄文土器・打製石斧・磨製石斧・石鏃などが出土した（市教委2002）。このほか若竹町遺跡（14）・悪王寺遺跡（19）・大利屋敷遺跡で縄文土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡は未確認である。中期に入ると経力遺跡（18）では、宅地造成に伴う発掘調査で、弥生時代中期の土坑を検出し、弥生土器が出土した（市教委2002）。本遺跡の北にある千石町遺跡では、宅地造成に伴う発掘調査で、弥生時代中期の方形周溝墓5基を検出し、弥生土器が出土した（市教委2015a・2015b）。富山市内で確認した唯一の弥生時代中期の墓域である。弥生時代後期に入ると富山市内全体では遺跡が急増する。本遺跡の西にある上野井田遺跡（27）では、令和元年度に病院建設に先立つ発掘調査で、弥生時代終末期の周堤帶をもつ堅穴建物を確認した。県東部では初の検出例である（市教委2021）。本遺跡の南西にある友杉遺跡（6）では、公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査で弥生時代後半の堅穴建物1棟が検出され、弥生土器が出土した。堅穴建物は方形プランで、床面から完形の弥生土器が潰れた状態で27点出土した（県財団2010）。続く古墳時代に入ると本遺跡の例のほか、友杉遺跡で古墳時代前期の土坑が1基検出され、土師器が出土した（県財団2010）。上新保遺跡では、宅地開発に伴う発掘調査で土坑1基を検出し、6世紀代の須恵器壺と蓋が出土した（市教委2000）。朝菜町鳥ノ木遺跡（30）では試掘調査で古墳時代後期の遺構と須恵器を確認した。

古代になると本遺跡周辺では開発が進み、神通川と熊野川に挟まれた地域で大集落が形成され、確認される遺跡が急増する。本遺跡の西には黒瀬大屋遺跡（2）・上野井田遺跡（27）、南西には任海宮田遺跡（7）・友杉遺跡・南中田D遺跡・吉倉B遺跡（11）、北東には上新保遺跡、朝菜町鳥ノ木遺跡など集落遺跡が濃密に分布する。黒瀬大屋遺跡では宅地開発に伴う発掘調査で一面庇掘立柱建物1棟・堅穴建物3軒・溝・土坑を検出し、綠釉陶器や「中田」墨書き土器・刻書き土器などが出土した。集落は7世紀に出現し、8世紀後半～9世紀前半、9世紀中頃～後半、9世紀後半～10世紀初めの3時期の変遷を確認した（市教委2018）。任海宮田遺跡では公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査で100棟を超える堅穴建物や掘立柱建物を検出し、「城長」「觀音寺」「寺」「根田」などの墨書き土器が約800点・石帯の帶飾り・綠釉陶器・奈良三彩火舎などが出土した。庇付大型掘立柱建物の存在から、公的施設や古代寺院の存在が推測されている（県財団2008）。上新保遺跡でも宅地開発に伴う発掘調査で堅穴建物や掘立柱建物を100棟以上検出した。しかし公的施設の特徴を示す遺物や土錐が出土しないため、任海宮田遺跡とは違う性格の農村集落が想定される（市教委2000・2009a・2009b）。

中世に入ると周辺一帯は徳大寺家領官河荘に比定される。任海宮田遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡・上新保遺跡などの集落遺跡が営まれ、熊野川東側には先述の本遺跡調査例のほか、蜷川館跡（5）や上熊野城跡・布市城跡などの城館跡が立地する。

近世には調査区周辺一帯はさらに広範囲で水田開発が進んだとみられる。上新保遺跡では桃井直常の末裔とされる家の敷地内で石垣遺構を検出し、近世屋敷跡を確認した（市教委2000）。（細辻）



図2 周辺の遺跡分布図 ($S=1/20000$)

0 1-20000 1km

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

表土掘削は重機を使用し、遺構検出面(IV層)の上面まで掘削した。遺構番号は、通し番号の前に遺構の種類を記号で付し、「NR01」・「SE34」のように呼称した。NR01の遺物は、1区から12区のブロックに分けて取り上げた。遺構の測量は、断面図を手実測、平面図を電子平板でを行い、縮尺は1/20とした。遺構の写真は、デジタル1眼レフカメラ(NikonD850)を使用し、RAWデータ撮影をした。遺跡の全景写真はラジコンヘリによる空中写真とし、デジタルカメラ(Canon EOS 5D Mark IV及びSONY ILCE-7RM2)にて撮影した。

遺物注記は手書きにて行い、遺跡記号・遺構名・遺物番号・取上日を「KSTD SE34 No.01 211124」というように注記した。遺物の写真撮影はデジタル1眼レフカメラ(NikonD850)を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成とともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式で入稿した。

第2節 層序

調査地点の標高は19.8m前後である。層序は調査区北壁を基本とした。I層は現代の水田耕作土(7.5YR5/2灰褐色粘質土)である。層厚は15~20cm。I層の下には、水田の床土であるII層(5B6/1青灰色粘質土)が堆積し、層厚5~10cmである。調査区の西側ではII層の下にIII層(7.5YR6/1褐色粘質土)が部分的に確認される。層厚は5~10cmである。少量であるが、古代の遺物を包含する。遺構確認面はIV層(7.5YR7/1明褐色シルト質土)である。IV層は層厚60cm以上あり、下部は灰色が強くなる。自然流路(NR01)の底面付近では、場所によってIV層に粗砂・礫が混入する。IV層上面の標高は概ね19.4~19.5mで、調査区北東隅に向かって緩やかに下がる傾向にある。なお調査区壁面をみると、III層上面から掘り込まれる遺構もあり、本来はIII層の上下で遺構を分けられる可能性がある。

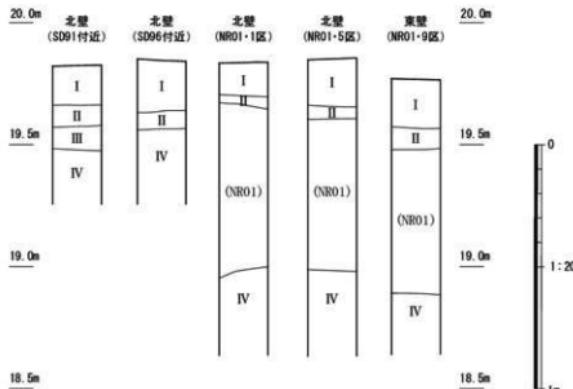


図3 基本層序

第3節 遺構

IV層の上面で古代から中世の遺構を検出した。内訳は自然流路1条、溝6条、井戸跡2基、土坑17基、ピット86基である。自然流路NR01は調査区内を斜行する大規模なもので、北西側では大きく蛇行する部分がある。井戸跡や土坑など、その他の遺構は自然流路の西岸に集中する傾向があり、自然流路から離れるほど遺構の分布は散漫になる。遺構の時期は大部分が平安時代であり、9～10世紀が主体である。自然流路はこれらの平安時代の遺構と併存し、中世になって埋没が進む。

1 自然流路

NR01(図4・7・14～16、図版3・4) 調査区の北側から東側に位置する。N-45°Wの方位に直線的に延びるが、西岸の北側は大きく蛇行する。遺物の取上のため、便宜的に1～12区のブロックに細分している(第7図)。流路の幅は調査区東側で7.5m、断面形状は逆台形である。深さは調査区東側(10区)で75cm、北側(7区)で67cm、西側蛇行部(1区)で58cmである。底面の標高は東側(10区)・北側(7区)ともに18.7mで平坦であるが、部分的に水流によるピット状の落ち込みがみられる。蛇行部分(1区)の標高は18.8mでわずかに高い。流路の埋没土は粗砂や小石を含む褐色灰色シルト質土を主体とする。蛇行部の1・2区は先行して埋没が始まり、6層によってほぼ完全に埋没する。本流部分は、5区西岸周辺で6層の堆積により埋没が始まる。5区の6層には、拳大から人頭大の礫と古代の遺物が多く含まれ、流路西岸から投棄されている(遺物集中地点)。流路はその後に2層の堆積によって完全に埋没する。2層出土の炭化物の年代測定は15世紀代を示す(第5章)。遺物は須恵器(22～46)、土師器(47～62)、灰釉陶器(63)、二彩陶器(64)、緑釉陶器(65)

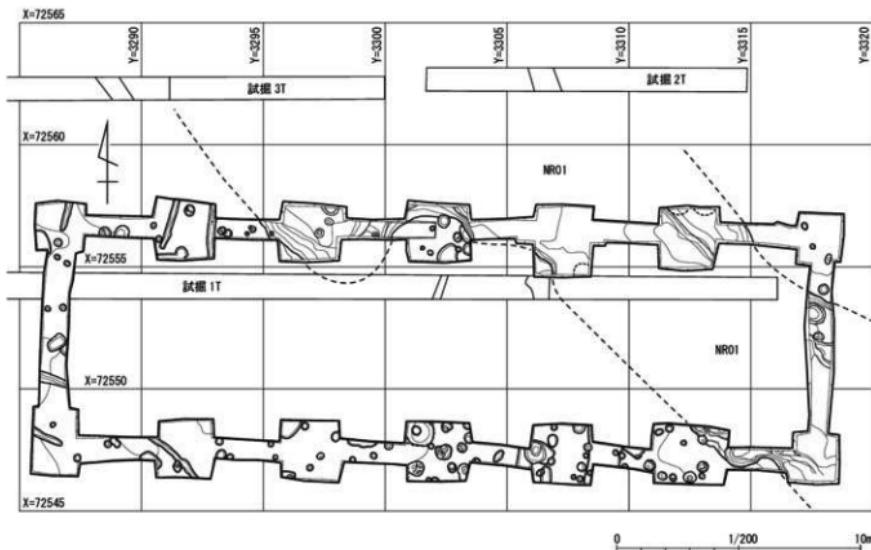
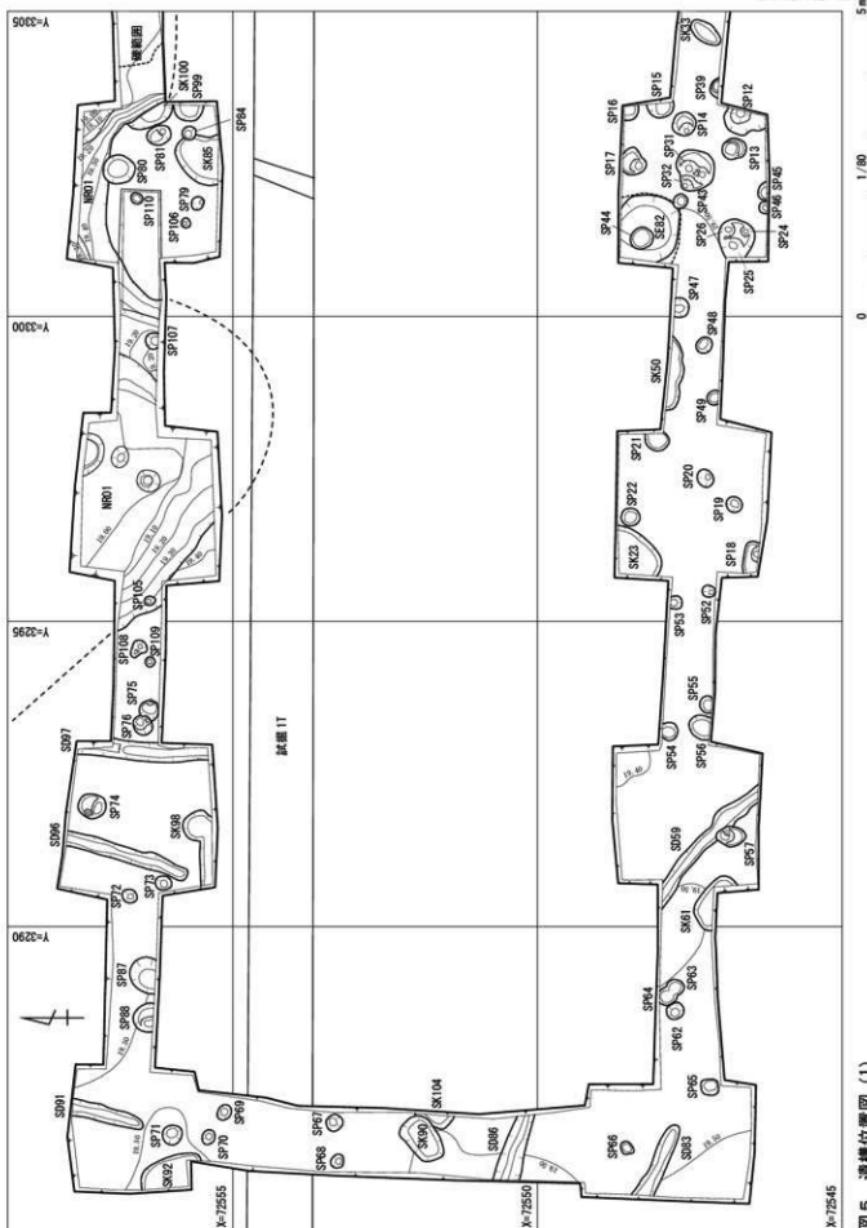


図4 調査区全体図

試圖 11



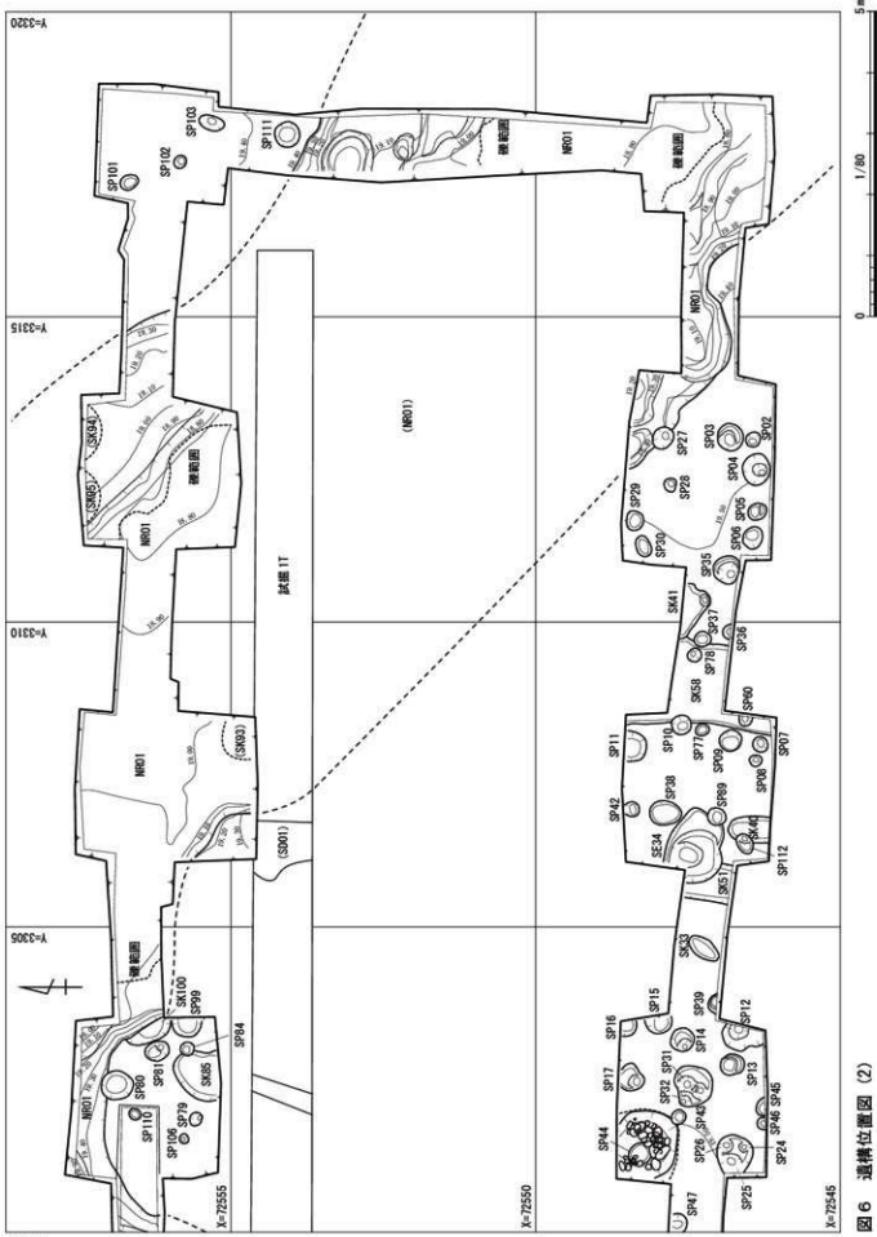


圖 6 遺構位置圖 (2)

～67)、白磁(68・69)、青磁(70)、珠洲(71)、越中瀬戸(72～74)、製塙土器(75～77)、土鍤(78)、木製品(79～82)、鉄滓などが出土した。流路は古代の遺物が示す9世紀には存在し、中世にかけて埋没が進んだと判断される。

2 溝

溝は6条検出した(図8・17、図版6)。いずれも調査区の西側に位置する小規模な溝である。SD59・86は緩やかに曲がる方向性が一致し、同一の溝と考えられる。規模はSD59が幅21cm、深さ12cm、SD86が幅35cm、深さ15cmである。SD86から須恵器杯(83)、土師器碗・甕が出土した。SD83はN-63°-Wの方位に延び、南東側は途切れる。幅24cm、深さ10cmである。SD91はN-13°-Eの方位に直線的に延び、南側は途切れる。幅は24cm、深さ16cmである。SD96はN-16°-Eの方位に直

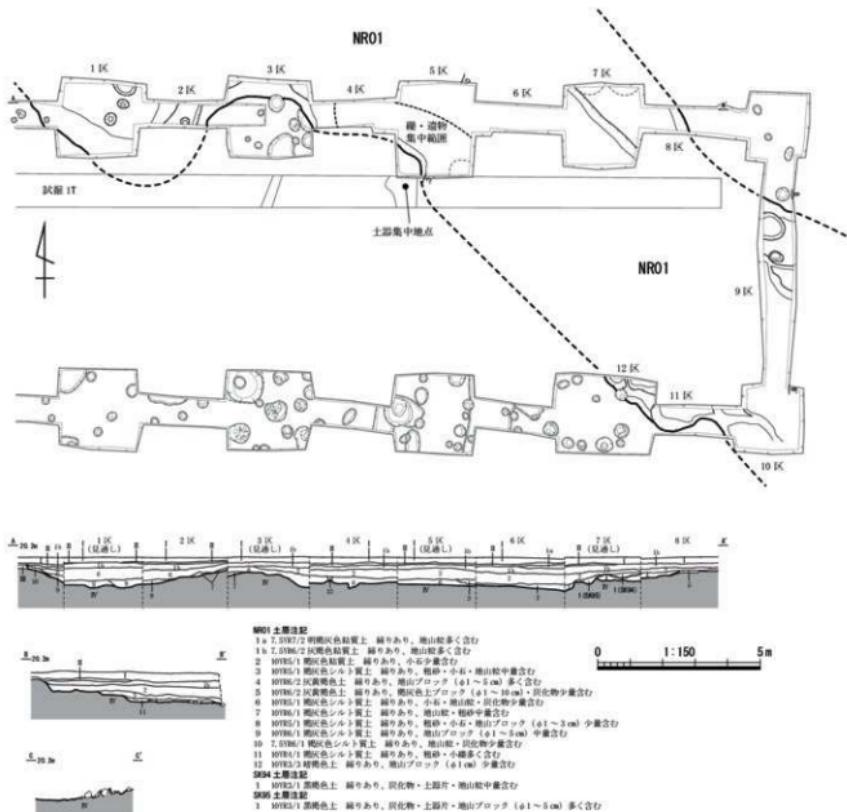


図7 NRO1 遺構図

線的に延び、南側は途切れる。幅23 cm、深さ7 cmである。遺物は須恵器杯、土師器碗、鉄滓が出土した。SD91・96は並走し、南側が途絶する点が類似し、同時期のものか。SD97はN 4° -Eの方位に直線的に延びる。幅30 cm、深さ11 cmである。遺物は須恵器杯、土師器碗・甕(84)が出土した。

3 井戸跡

SE34 (図9・18、図版5)

調査区南側に位置する。素掘りの井戸跡である。規模は径86 cm、深さ73 cmで、円筒状を呈する。東側に深さ8 cmの浅い張り出しがある。SK51・SP89と切り合い、SE34が新しい。覆土は礫を多く含むシルト質土が主体である。遺物は須恵器蓋・杯、土師器碗(85~87)・甕、製塩土器、鉄滓が出土し、遺構の時期は9世紀後半と考えられる。

SE82 (図9・18、図版5)

調査区南側に位置する。漏斗状の断面形を呈する。上部は径1.1 mの不整円形で、亜円礫を積み上げている。下部は径0.4~0.5 mの円形である。掘り方には径1.2 m以上の円形と推定される。覆土は礫を多く含む。遺物は須恵器蓋(88・89)・杯・瓶・壺(90)・甕、土師器碗(91・92)・甕、土鍾のほか、1層から軟質陶器の鉢(93)が出土した。検出面付近で中世土器があるものの、遺物のはとんどが古代である。遺構の時期は9世紀後半と考えられる。

4 土坑

土坑は17基を検出した(図10・19、図版5・6)。平面形状は長方形(SK23・41・51・58・61・90・92・104)、楕円形(SK33・40・100)、不整形(SK50・85・98)がある。SK93~95の3基はNR01の断面観察で確認したもので、平面形や規模が不明である。規模の全容が分かる土坑は少なく、SK33が長径57 cm、短径31 cm、深さ11 cm、SK90が長径82 cm、短径51 cm、深さ19 cmである。SK58は長径2.46 m以上、短径1.29 mで規模が大きく、溝の可能性もあるが、深さは11 cmと浅い。NR01との切り合ひはSK94・95がNR01より古く、SK93はNR01より新しい。土坑の覆土は黒褐色土ないし褐灰色土で、SK85は亜円礫を多く含んでいた。SK33は覆土に焼土・炭化物・鉄滓・輪羽口を多く

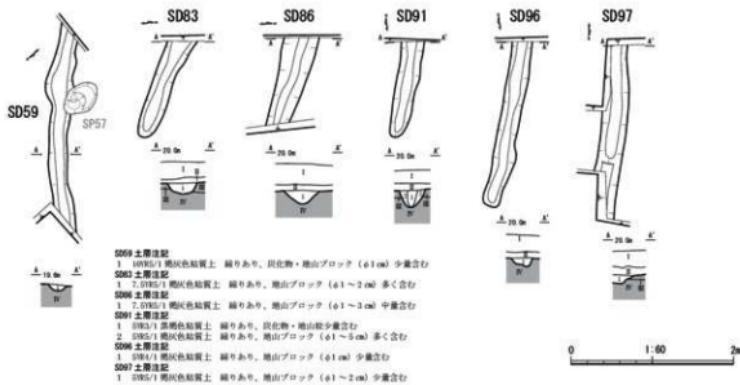


図8 SD遺構図

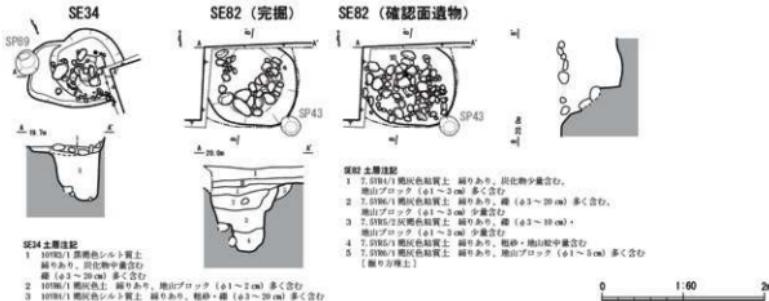


図9 SE 遺構図

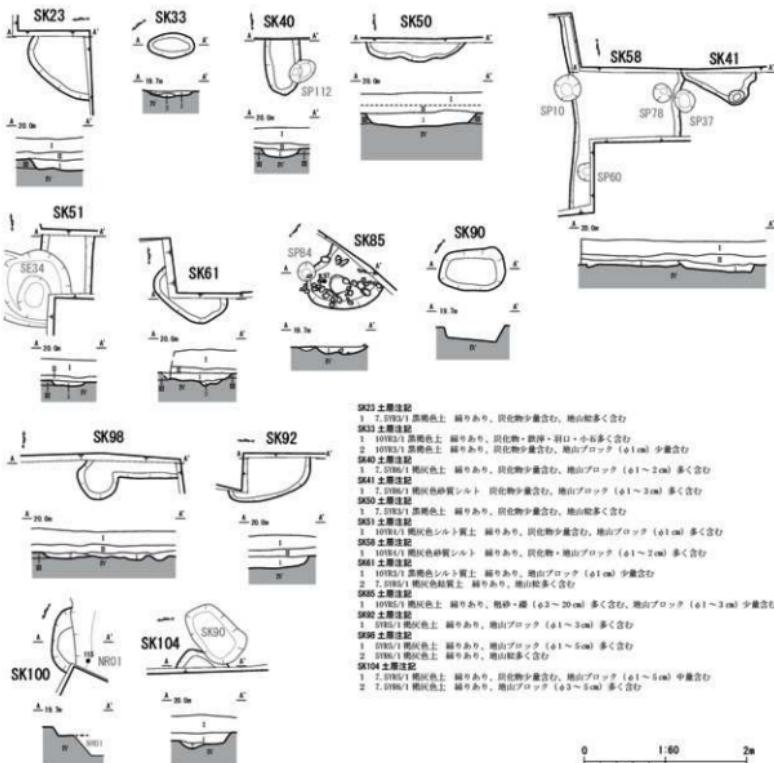


図10 SK 遺構図

含んでいたが、土坑は被熱しておらず、鍛冶関連遺物の廃棄土坑と考えられる。遺物はSK23から須恵器杯(94)、SK41から須恵器蓋(95)、SK50から須恵器杯(96)、SK85から土師器碗(97)、SK90から土錐(98)、SK92から須恵器瓶類(99)、SK93から土師器杯(100)・碗(101~103)・甕(104)、SK94から土師器碗(105~107)・甕(108~111)、綠釉陶器碗(112)、SK95から土師器碗(113・114)、SK100から土師器碗(115)が出土した。遺物の多くは9世紀のもので、一部に8世紀のものがみられる。

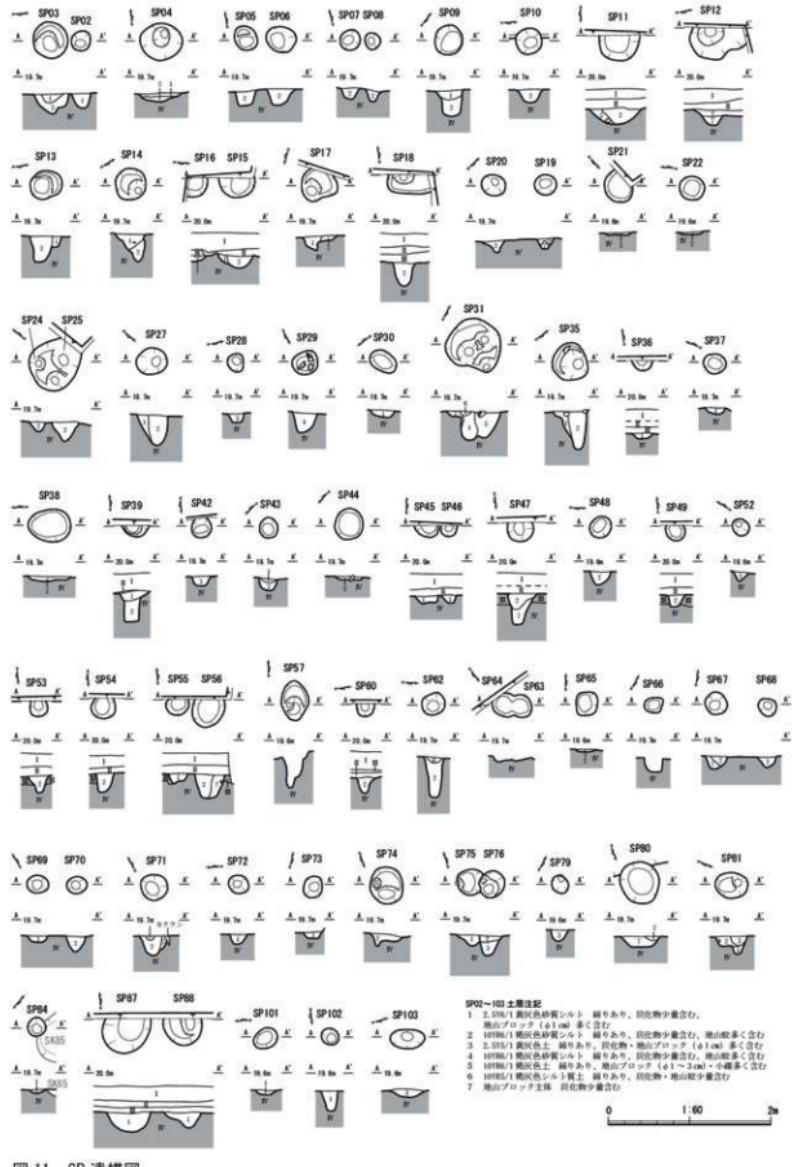
5 ピット

86基のピットを検出した(図11、図版6)。平面形は円形基調で、SP15・16・24・25・30・31・46・57・103は楕円形である。平面規模は径50cm以下がほとんどで、50cmを超えるものはSP04・38・80が53cm、SP87が56cm、SP31が65cm、SP12が70cmである。深さは概ね40cm以下で、40cmを超えるものはSP31が45cm、SP35・57が46cm、SP62が49cmである。ピットからは須恵器蓋・甕・甌・土師器皿・壺・碗・甕など古代の土器が出土した。SP36からは刀子(133)が出土した。中世の遺物は出土しておらず、多くのピットは古代のものと考えられる。

表1 遺構一覧表

卓視報の数値における。+は現存紙を示す。

遺構番号	規格(m)	主軸方位、出土遺物、切合いなど	遺構番号	規格(m)	主軸方位、出土遺物、切合いなど	遺構番号	規格(m)	主軸方位、出土遺物、切合いなど	
(名)	(幅)	(高)	(名)	(幅)	(高)	(名)	(幅)	(高)	
NR01	21.07	7.50 0.75	45 ⁺ ・土師器蓋・甕・甌・須恵器蓋・瓶・壺・土錐	SP07	0.28 0.25 0.07	須恵器杯・土師器蓋	SP77	0.23 0.19 0.05	土師器蓋
			SP08	0.53 0.40 0.05	須恵器蓋・土師器蓋	SP78	0.23 0.22 0.33	土師器蓋・甕	
			SP39	0.34 0.31 0.31	須恵器杯・土師器蓋	SP79	0.23 0.20 0.33	土師器蓋・甕	
			SP40	0.60 0.44 0.06	須恵器杯・土師器蓋	SP80	0.53 0.47 0.11	土師器蓋・甕	
SP02	0.28 0.24 0.19	土師器蓋	SP41	0.60 0.60 0.22	SK8より新、須恵器蓋・甕・土師器蓋	SP81	0.40 0.32 0.20	土師器蓋・甕	
SP03	0.45 0.43 0.26	須恵器杯・土師器蓋	SP42	0.21 0.23 0.12	土師器蓋・甕	SP82	1.23 ⁺ 1.11 0.74	SP41より古、須恵器蓋・瓶・甕・甌・土師器蓋・甕・土質陶器・甌・瓦・板瓦	
SP04	0.53 0.46 0.33	土師器蓋・甕	SP43	0.25 0.23 0.19	土師器蓋	SP83	0.56 0.41 0.26	須恵器蓋・土師器蓋・甕・板瓦・土質陶器・甌・瓦	
SP05	0.32 0.27 0.23	須恵器蓋・甕・土師器蓋	SP44	0.39 0.34 0.05	SK8より新、土師器蓋	SP84	0.48 0.33 0.16	土師器蓋・甕・瓦	
SP06	0.36 0.31 0.23	土師器蓋・甕	SP45	0.30 0.14 0.05	土師器蓋	SP85	1.29 ⁺ 0.24 0.10	63 ⁺ ・土師器蓋・甕	
SP07	0.26 0.25 0.12	須恵器杯	SP46	0.29 0.19 0.06	須恵器杯	SP86	0.24 0.23 0.07	土師器蓋	
SP08	0.21 0.19 0.16	土師器蓋・甕	SP47	0.33 0.32 0.27	須恵器杯・土師器蓋・甕・須洋	SP88	0.79 0.71 0.10	土師器蓋・甕・土錐	
SP09	0.37 0.34 0.34	土師器蓋・甕・民化物	SP48	0.29 0.25 0.18	土師器蓋・甕・土錐	SP89	1.12 ⁺ 0.35 0.15	72 ⁺ ・須恵器杯・土師器蓋・甕	
SP10	0.33 0.32 0.19	SK8より新、須恵器蓋・土師器蓋	SP49	0.23 0.21 0.01	須恵器蓋・土師器蓋	SP90	0.56 0.41 0.26	須恵器蓋・土師器蓋・甕・板瓦・土質陶器	
SP11	0.50 0.31 0.10	土師器蓋・甕	SP50	0.22 0.21 0.06	須恵器杯・土師器蓋・甕	SP91	0.48 0.33 0.16	土師器蓋・甕・瓦	
SP12	0.30 0.30 0.14	須恵器蓋・甕・土錐	SP51	0.50 0.47 0.19	須恵器蓋・甕・瓦・土錐	SP92	0.31 0.28 0.30	SE34より古、土師器蓋・甕・須洋	
SP13	0.49 0.32 0.34	須恵器蓋・土師器蓋・甕・土錐	SP52	0.22 0.19 0.22	土師器蓋	SP93	0.31 0.28 0.30	SE34より古・土師器蓋	
SP14	0.41 0.38 0.36	土師器蓋・甕	SP53	0.21 0.19 0.12	土師器蓋	SP94	-	0.15	
SP15	0.44 0.29 0.12	土師器蓋	SP54	0.30 0.25 0.09	-	SP95	0.24 0.19 0.19	須洋より古、土師器蓋・甕・板瓦・土質陶器	
SP16	0.50 0.22 0.07	土師器蓋	SP55	0.29 0.20 0.07	土師器蓋	SP96	0.21 0.23 0.07	16 ⁺ ・須恵器杯・土師器蓋・甕	
SP17	0.45 0.38 0.18	須恵器蓋	SP56	0.41 0.35 0.19	須恵器蓋・甕・須洋	SP97	0.24 0.19 0.12	土師器蓋・甕・瓦	
SP18	0.28 0.12 0.30	土師器蓋・甕	SP57	0.49 0.34 0.40	-	SP98	0.21 0.24 0.07	須洋より古、土師器蓋・甕・須洋	
SP19	0.27 0.25 0.13	土師器蓋	SK8 ⁺	0.26 0.29 0.11	SE31より古・須恵器蓋・甕・土錐・須洋	SP99	-	0.30	
SP20	0.30 0.25 0.21	土師器蓋	SP59	0.40 0.21 0.12	47 ⁺ ・須恵器蓋・甕・土師器蓋・甕	SP100	0.21 0.23 0.07	16 ⁺ ・須恵器杯・土師器蓋・甕・須洋	
SP21	0.37 ⁺ 0.34 0.04	土師器蓋	SP60	0.22 0.34 0.21	土師器蓋	SP101	0.24 0.19 0.14	須恵器蓋・甕・土師器蓋	
SP22	0.31 0.39 0.03	-	SP61	3.21 0.47 0.07	土師器蓋	SP102	-	-	
SK23	0.80 ⁺ 0.72 0.06	須恵器蓋・土師器蓋・甕	SP62	0.29 0.26 0.49	土師器蓋	SP103	0.24 0.19 0.06	須恵器蓋・土師器蓋・甕・須洋	
SP24	0.20 0.16 0.15	-	SP63	0.29 0.28 0.28	-	SP104	0.53 0.30 0.06	羽口・須洋	
SP25	0.63 ⁺ 0.59 0.29	須恵器蓋・土師器蓋・甕	SP64	0.29 0.29 0.05	對塗土器	SP105	0.67 0.28 0.11	土師器蓋・甕・須洋	
SP26	0.24 0.24 0.19	-	SP65	0.33 0.25 0.03	土師器蓋	SP106	0.31 0.24 0.07	須恵器蓋	
SP27	0.38 0.33 0.40	須恵器蓋・土師器蓋(内黒合口)・須洋	SP66	0.24 0.19 0.16	須恵器蓋・土師器蓋	SP107	0.22 0.20 0.26	土師器蓋	
SP28	0.22 0.21 0.11	土師器蓋	SP67	0.25 0.24 0.15	對塗土器	SP108	0.43 0.25 0.10	土師器蓋	
SP29	0.32 0.30 0.27	須恵器蓋・土師器蓋・甕	SP68	0.24 0.21 0.15	-	SP109	0.53 0.30 0.06	羽口・須洋	
SP30	0.35 0.24 0.09	須恵器蓋・甕・土師器蓋	SP69	0.35 0.26 0.22 0.10	-	SP110	0.18 0.16 0.27	須恵器蓋・土師器蓋・甕	
SP31	0.65 0.60 0.45	SP10上り古・須恵器蓋・土師器蓋・甕	SP70	0.25 0.29 0.18	-	SP111	0.16 0.15 0.07	-	
SP32	0.23 0.19 0.22	SP11上り古	SP71	0.34 0.32 0.27	土師器蓋	SP112	0.27 0.20 0.50	土師器蓋	
SK33	0.57 0.31 0.11	須恵器蓋・土師器蓋・甕	SP72	0.36 0.23 0.13	土師器蓋	SP113	0.31 0.25 0.18	-	
SE34	1.23 ⁺ 0.84 0.73	SE31より古・須恵器蓋・土師器蓋・甕・製塙工具・瓦	SP73	0.25 0.23 0.08	土師器蓋	SP114	0.16 0.16 0.10	-	
SP35	0.47 0.45 0.46	須恵器蓋・土師器蓋(内黒合口)・甕	SP74	0.46 0.41 0.14	土師器蓋・羽口	SP115	0.20 0.18 0.32	-	
SP36	0.26 0.13 0.07	土師器蓋・刀子	SP75	0.34 0.32 0.16	SP76より古・須恵器蓋・土師器蓋	SP116	0.41 0.40 0.04	-	
			SP76	0.34 0.31 0.31	SP77より新・土師器蓋・甕	SP117	0.35 0.25 0.13	-	



第4節 遺物

出土遺物は試掘調査、自然流路 NR01、遺構、遺構確認面、表土・表採に分けられる。試掘調査 1T 内の SD01 や自然流路 NR01 の 5 区など、自然流路の蛇行部西岸で出土量が多い。遺物は平安時代の土器類が大部分を占め、とくに土師器碗の多さと縁袖陶器の出土が特筆される。土師器碗は底部の回転糸切りが右回転を主体とするが、客観的にみられる左回転の一群は、胎土に海綿骨針を特徴的に含み、器形や赤彩も類似することから、一括性のある土器と判断される。その他には、製塙土器、土鍤、鍛冶関連遺物があり、これらも古代のものと考えられる。製塙土器は棒状尖底タイプと平底バケツ形タイプの二種が存在する。また自然流路の覆土上部には中近世の遺物が散見し、流路の埋没時期を示している。

1 試掘調査出土遺物

試掘調査で出土した遺物である（図 12・13、図版 7・8・12）。1T 内の SD01 では土器（碗）が一括出土した。須恵器は 1 点（2）のみで、土師器が 20 個体以上（3～16）出土した。2 は未還元焼成の須恵器碗で、9 世紀中頃のもの。3～17 はロクロ成形の土師器碗である。底部は回転糸切りである。口径は 12.0～14.5 cm、器高は 3.9～5.2 cm である。器形は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に開くもの（3・6～8・10・12）、外反するもの（9・11）、内湾するもの（4・5・13～15）がある。このなかで、5・14～16 は、内湾する口縁部、底部左回転糸切り、内外面赤彩、海綿骨針を含む胎土が共通しており、一括して製作・流通したものと考えられる。その他は底部右回転糸切りで、外面のみ赤彩するものは 6～8・13 である。17 は体部片で、外面に墨書がみられる。土師器碗はいずれも 9 世紀後半のものである。2T では、須恵器蓋（1）、胴部カキメ調整の土師器甕（18）が出土した。19 は灰釉陶器の段皿である。20・21 は製塙土器である。20 はバケツ形平底タイプの口縁部と考えられる。21 は棒状尖底タイプである。外面の粘土紐痕はナデ消され、脚部周辺は指頭圧痕が強く残る。内底部には絞り目が残る。胎土には海綿骨針が顕著に含まれる。

試掘調査

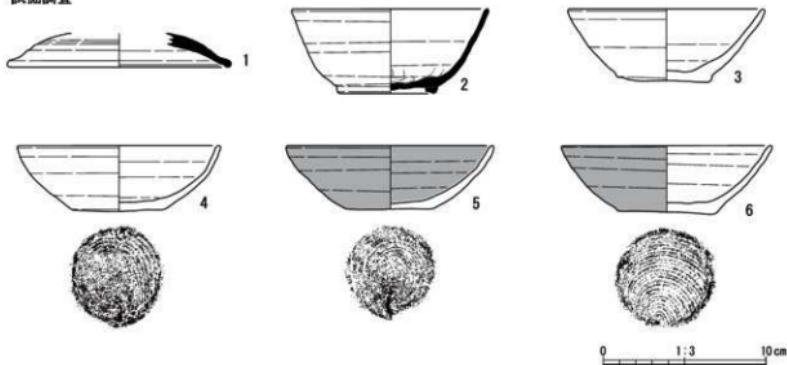


図 12 試掘調査出土遺物（1）

試掘調査

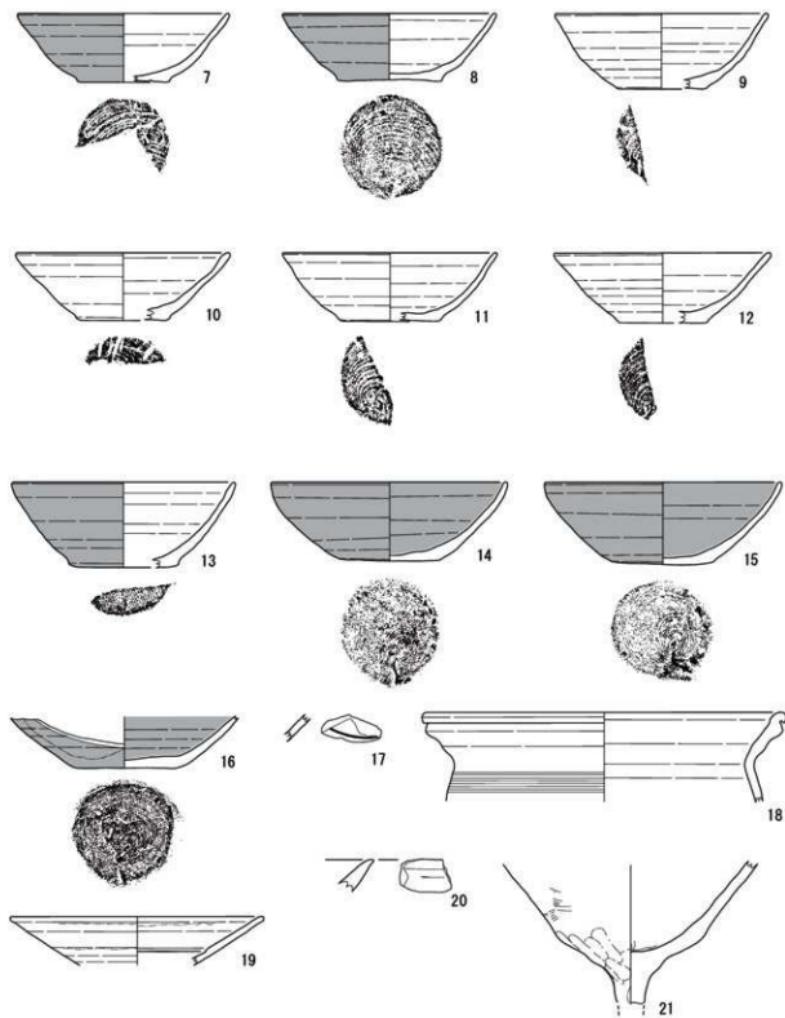


図 13 試掘調査出土遺物 (2)

2 自然流路出土遺物

NRO1 (図14~16、図版8・9・11・12) 6層を主体とする覆土下層からは古代の遺物が、上層の2層からは古代～中世の遺物が出土した。22~46は須恵器である。22~26は杯蓋である。口径は12~14cm台で、口縁端部が短く垂下するもの、折れ曲がるものがある。すべて内外面ロクロナデである。27は杯Aである。口径12.4cm。底部はヘラ切りで、内底部をユビナデ調整する。28~32は杯Bである。法量は口径10cm台で器高4cm台の28・29、口径13cm台で器高3cm台の30、口径14cm台で器高5cm台の32がある。底部はヘラ切りで高台を貼り付ける。30は内底部をユビナデ調整する。33は無台の皿Aである。底部は回転糸切り。34は蓋蓋である。天井部は回転ヘラケズリ後に沈線を施す。35・36は瓶類の口頸部である。口縁端部を下方へ垂下させる。37・38は短頭壺ないし直口壺の肩部。ロクロ成形で、外面には37が沈線、38がカキメを施す。38は内面に墨痕がある。39・40は突帯が付く瓶の破片で、39は外面にはタタキがみられる。41は小型の壺である。平底の徳利形で、底部は回転糸切り。外面は、胴部の上位と下位に沈線を巡らせ、胴部下位から底部にかけてヘラケズリを施す。42~46は甕である。42~44は口縁部片で、42は波状文を施す。45・46は頸部から胴部の破片で、胴部はタタキ調整される。これらの須恵器は、9世紀の特に後半を主体としつつ、8世紀後半のものも一定量存在する。

47~62は土師器である。47~53は無台の碗である。口径は11~12cm台で、底部はすべて右回転糸切りである。47は内面に赤彩を施す。54・55是有台の碗である。55は底部回転糸切りで、高さのある高台が体部側に付く。胎土に海綿骨針を含む。56は無台の皿である。底部は右回転糸切りで、口縁部は外反する。57~62はロクロ成形の甕である。57・58は小型の甕である。57は口縁部が短く外傾し、端部を丸く收める。口径12.6cm。58は平底の底部。59~62は口径18cm台で、外形する口縁の端部を面取りするもの(60)、面取りした端部をわずかに引き上げるもの(59・61)、端部を短く屈曲させるもの(62)がある。これらの土師器は9世紀代に収まるものであり、9世紀後半に主体がある。

63~67は施釉陶器である。63は灰釉陶器の碗である。内底部の欠損部付近に段がみられる。64は緑白二彩の碗で、口径10.9cmに復元される。胎土は濃い灰色を呈し、薄手で硬質である。釉は濃緑釉で連弧文を描いていると推測され、白釉は緑釉を含んで淡緑色となる。65・66は緑釉陶器の大皿で、同一個体の可能性がある。胎土は灰色で軟質である。釉は淡緑色で光沢がある。67は緑釉の手付水注の把手付近と考えられる。胎土は灰白色で軟質である。釉は灰色ががっており、風化が著しい。

68~69は白磁である。68は口縁が内湾気味の皿、69は口縁部が外反し、上端部を水平にする碗である。12世紀のもの。70は龍泉窯系青磁の碗で、見込みに片彫りで草花を描く。割れ口の一部が研磨され、砥石に転用された可能性がある。

71は珠洲の甕である。短頭でくの字に屈曲し、口縁端部が方頭になる14世紀代のものである。72~74は越中漸戸の皿である。72・73は削り出し高台で、高台断面は逆三角形になる。釉止めの段をもつ。72・73は内外面鉄釉である。

75~77は製塙土器である。75・76は外傾する口縁部、77は平底の底部で、バケツ形平底タイプと考えられる。

78は土師質の管状土錐で、樽型に分類される。

79~82は木製品である。79~81は板状品で、厚さ0.5~0.7cm。79・80は炭化部分があり、79は火付け木か。82は厚さ0.75cmの柾目板を曲物にしたもので、木釘孔がある。内面に漆の付着がみられる。

NR01

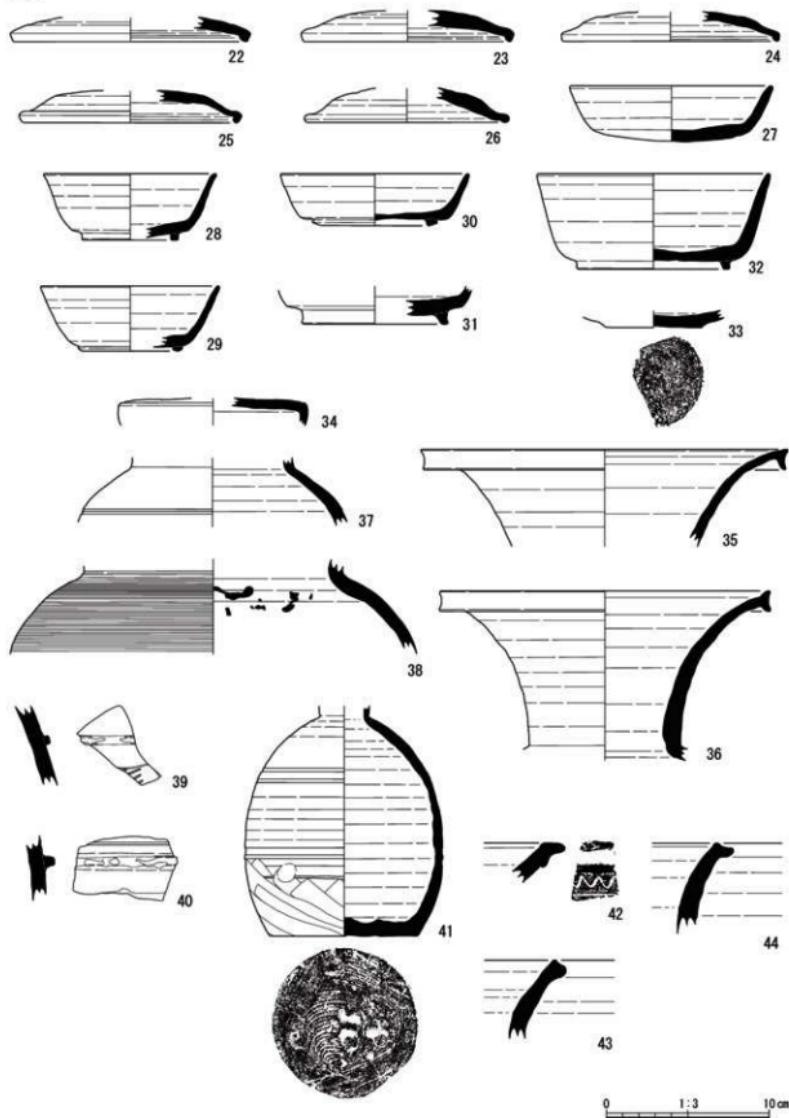


図 14 自然流路出土遺物 (1)

NR01

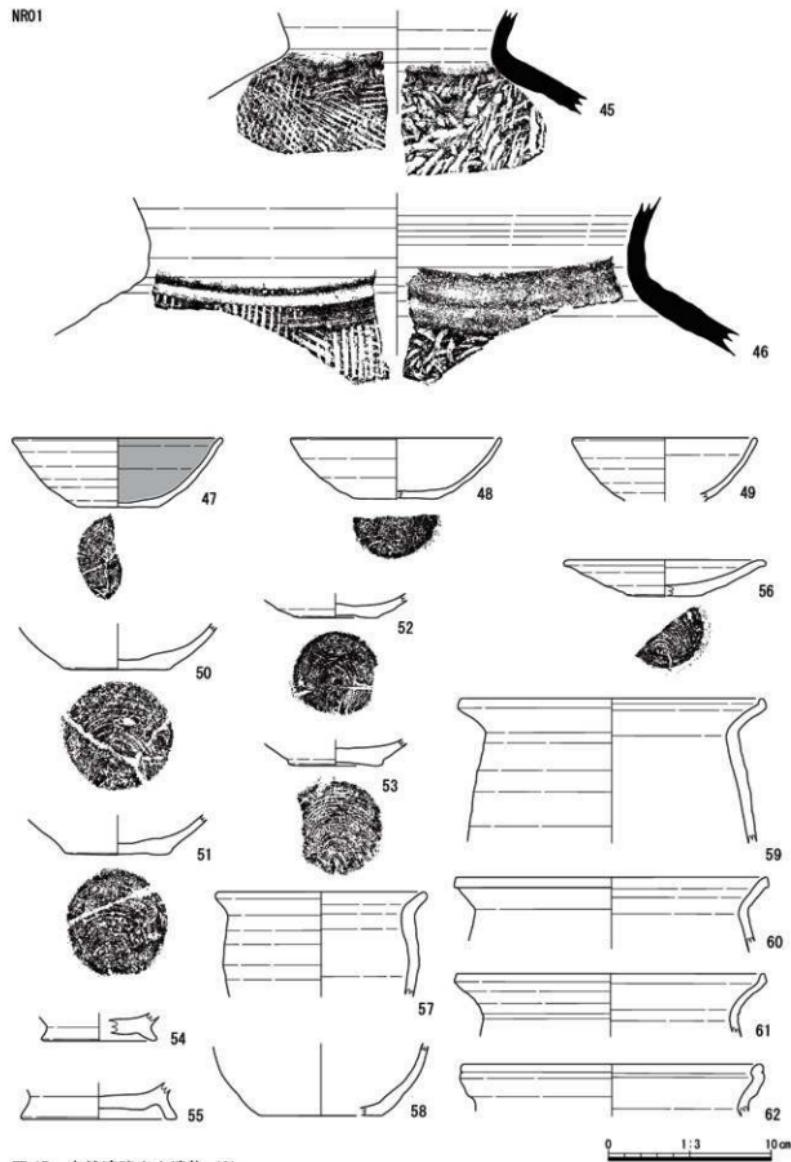
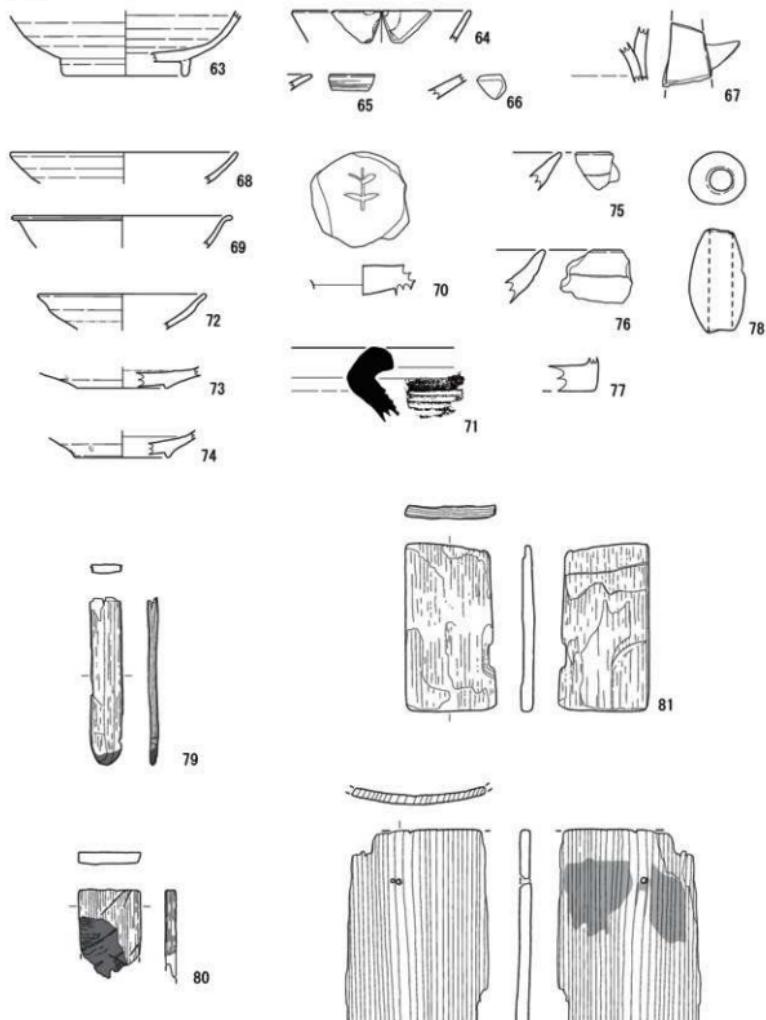


図 15 自然流路出土遺物 (2)

0 1:3 10cm

NR01



0 1:3 10cm

図 16 自然流路出土遺物 (3)

3 溝出土遺物

溝からは須恵器杯、土師器碗・甕などが出土した。いずれも9世紀代に収まるものである。

SD86 (図17、図版10) 83は須恵器杯Bである。内底部にユビナデを施す。

SD97 (図17、図版10) 84は土師器甕。口縁端部を上方へ引き上げ、丸く收める。

4 井戸跡出土遺物

井戸跡からは須恵器蓋・杯・瓶・壺・甕、土師器碗・甕、製塙土器などが出土した。概ね9世紀のものであるが、SE82の最上部で出土した93は、中世遺物の混入か。

SE34 (図18、図版10) 85～87は土師器の無台碗である。85は底部右回転糸切り、86・87は底部左回転糸切りである。85・86は外面に、87は内面に赤彩を施す。

SE82 (図18、図版10) 88・89は須恵器の蓋である。口径11～12cm台で、口縁端部は丸く收まる。90は球洞の短頸壺で、口径は8.2cm、口縁部は直立する。91・92は土師器の碗である。91は内面に赤彩を施し、口径は14.2cmである。92は糸切り底である。93は軟質陶器の鉢である。口径35.9cm、ロクロ成形で外面の体部下半はナデを施す。色調はにぶい橙色を呈し、二次被熱がみられる。



図17 溝出土遺物

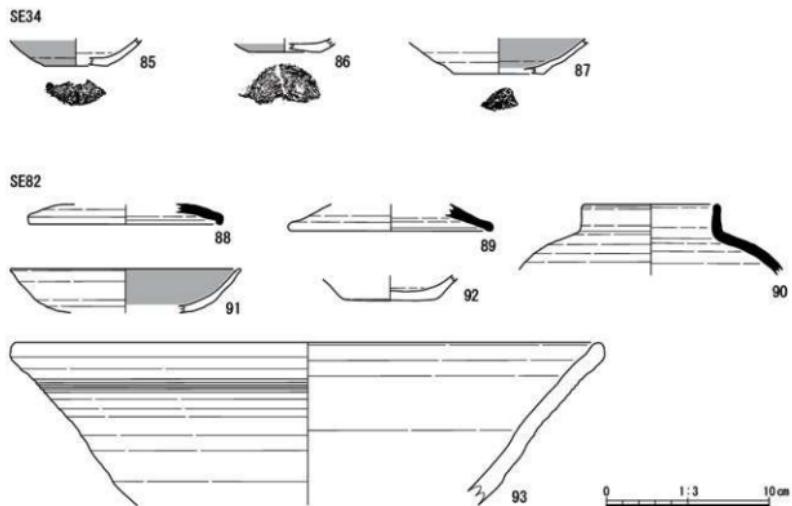


図18 井戸跡出土遺物

5 土坑出土遺物

SK23 (図19、図版10) 94は須恵器杯Bである。8世紀後半のもの。

SK41 (図19、図版10) 95は須恵器杯蓋である。天井部の周縁をヘラケズリする。9世紀後半のもの。

SK50 (図19、図版10) 96は須恵器杯B。ロクロ痕が強く、やや雑な作りである。9世紀のもの。

SK85 (図19、図版10) 97は土師器碗である。試掘1Tで出土した、底部左回転糸切りで胎土に海綿骨針を含む一群と同タイプである。内外面赤彩である。9世紀後半のもの。

SK90 (図19、図版12) 98は管状土錐である。樽型に分類される。

SK92 (図19、図版10) 99は須恵器瓶類である。口縁端部を下方へ垂下させる。9世紀代のもの。

SK93 (図19、図版10) 100～103は土師器碗である。100は口径15.3cm。101～103は糸切り底。103は赤彩ではないものの、試掘1Tにみられた底部左回転糸切りで胎土に海綿骨針を含む一群と同タイプである。104は土師器甕で、底部は回転糸切りである。100は9世紀、ほかは9世紀後半を主体とする。

SK94 (図19、図版10) 105～111は土師器である。105～107は無台の碗である。105は口径13.4cm、器高3.2cmの浅い碗で、内外面赤彩を施す。106・107は糸切り底。108～111は甕である。108・109は同一の可能性がある甕である。胴部上半はロクロ痕が強く、下半～底部は外面ヘラケズリである。外面に煤が付着する。110は外形する口縁に短く外反する端部を附加したもの。111は非ロクロ成形の甕で、8世紀のものか。ほかは9世紀のものである。112は緑釉陶器碗の口縁部片である。胎土は灰色を呈し、軟質である。釉は濃緑釉で光沢がある。9世紀のもの。

SK95 (図19、図版10) 113・114は土師器の碗である。9世紀のもの。

SK100 (図19、図版10) 115は土師器の碗である。底部右回転糸切りで、内外面に赤彩を施す。9世紀後半のものである。

6 ピット出土遺物

SP03 (図20、図版11) 116・117は土師器の碗である。116は内外面赤彩、117は内面黒色処理を施す。9世紀のものである。

SP05 (図20、図版11) 118は須恵器甕である。口縁端部が短く内傾する。

SP07 (図20、図版11) 119は須恵器杯Aである。8世紀前半のもの。

SP12 (図20、図版11) 120は須恵器杯蓋である。121は土師器甕で、口縁端部は上方へ折り曲げ、受け口状を呈する。いずれも9世紀後半のものである。

SP15 (図20、図版11) 122・123は土師器で、122は糸切り底の無台碗、123は低い高台が付く碗Bである。9世紀のもの。

SP25 (図20、図版11) 124は須恵器杯Aである。内外面に油煙が少量付着する。125は糸切り底の土師器碗である。いずれも9世紀のもの。

SP27 (図20、図版11) 126は須恵器杯である。未還元焼成である。9世紀後半のもの。

SP29 (図20、図版11) 127は須恵器甕である。口縁部の突帯下に波状文と沈線を施す。8世紀後半のもの。

SP30 (図20、図版11) 128は須恵器杯Aである。未還元焼成である。

SP31 (図20、図版11) 129・130は土師器碗である。129は糸切り底で、内面に赤彩を施す。いずれも9世紀後半のものである。

SP35 (図20、図版11) 131は須恵器杯A、132は低い高台が付く土師器碗Bである。131は8世紀前半、

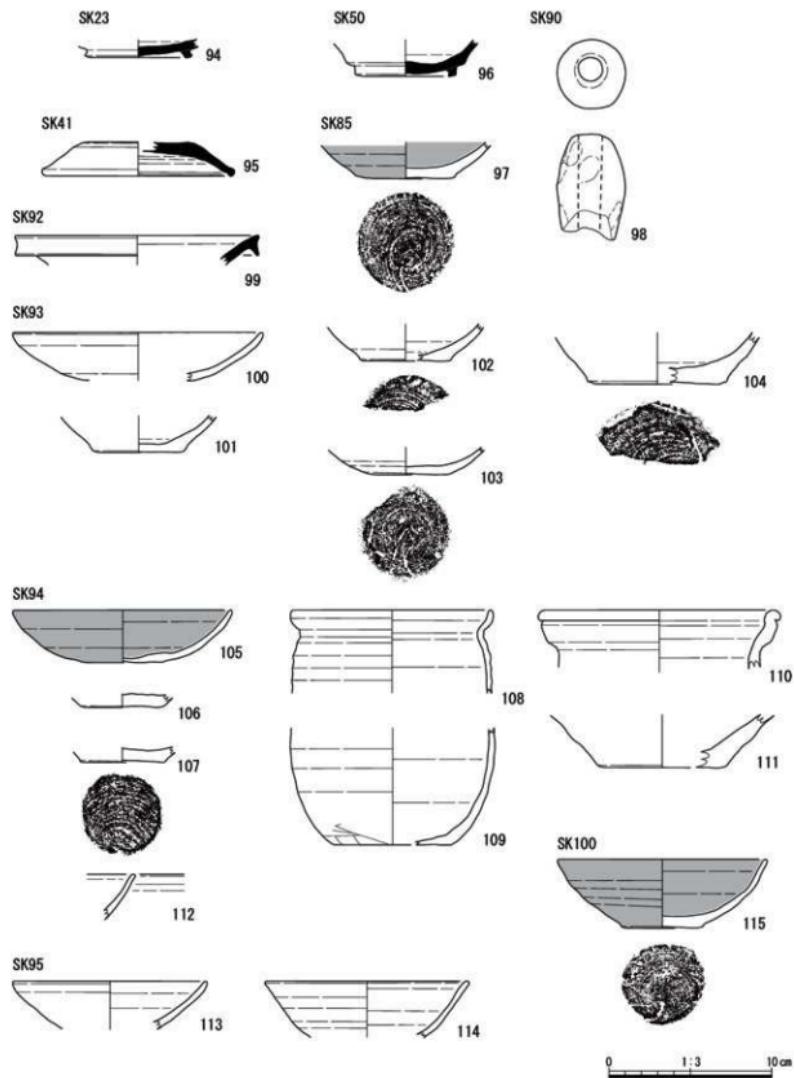


図 19 土坑出土遺物

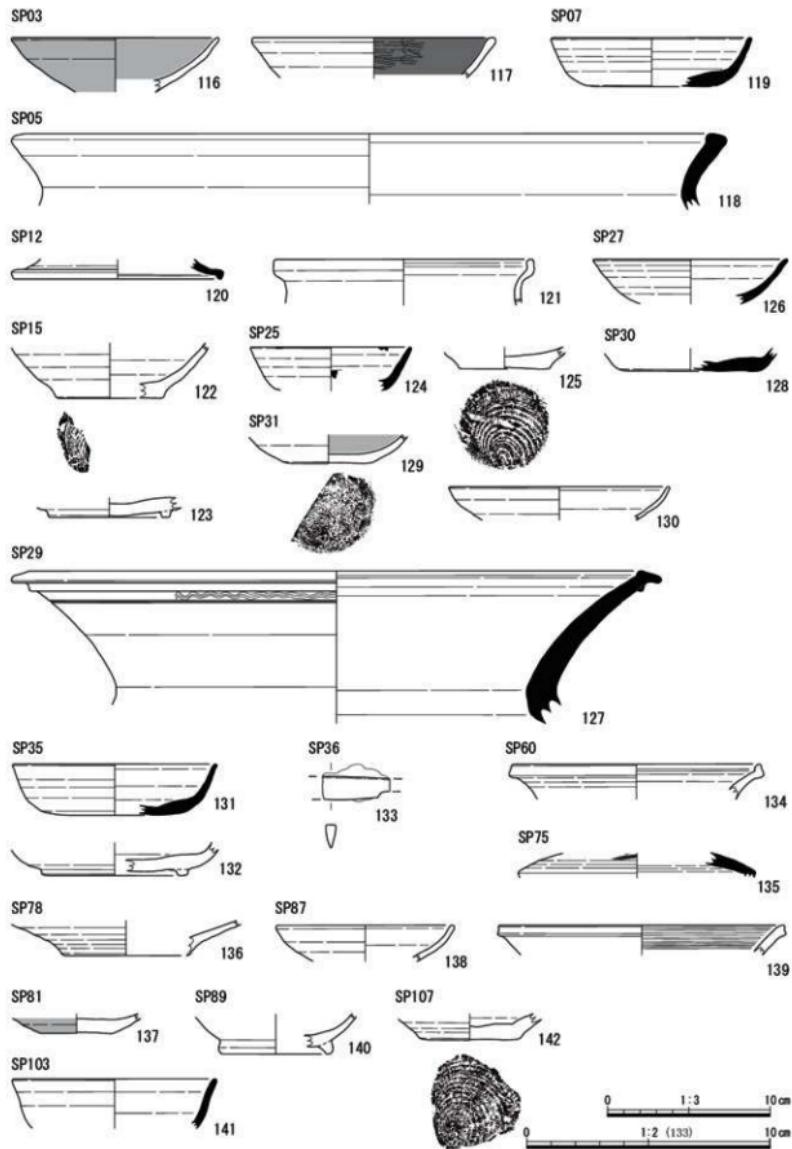


図20 ピット出土遺物

132は9世紀のものである。

SP36 (図20、図版12) 133は鉄製の刀子である。関部の形状は片闇。

SP60 (図20、図版11) 134は土師器甕である。口縁端部を上方へ折り曲げる。9世紀のもの。

SP75 (図20、図版11) 135は須恵器杯蓋である。8世紀代か。

SP78 (図20、図版11) 136は土師器の無台皿である。9世紀後半のもの。

SP81 (図20、図版11) 137は土師器碗である。外面に赤彩を施す。9世紀のもの。

SP87 (図20、図版11) 138は土師器碗である。139はロクロ成形の土師器甕で、口縁部内面にカキメを施す。138が9世紀、139が8世紀のものである。

SP89 (図20、図版11) 140は土師器の碗Bで、外面に煤が付着する。9世紀後半のもの。

SP103 (図20、図版11) 141は8世紀後半の須恵器杯である。

SP107 (図20、図版11) 142は土師器碗である。糸切り底で、9世紀のもの。

7 確認面出土遺物

遺構検出作業で出土した遺物である (図21、図版11・12)。

143～146は須恵器である。143・144は杯蓋である。144は内面にナデ調整を施す。9世紀のもの。145は杯A、146は底径25.5cmに復元される高台付の盤で、焼成はやや未還元である。8世紀のものである。

147～149は土師器である。147・148は糸切り底の無台碗で、147は内外面に赤彩を施す。149は高台の付く碗Bである。いずれも9世紀後半のものである。

150は灰釉陶器の碗である。口径15.0cmに復元され、口縁部は短く外反する。内外面施釉される。

151は鉄釘である。断面方形で、端部が折れ曲がる。

8 表土出土遺物

重機による表土掘削の際にI層ないしII層から出土した遺物である (図22、図版11・12)。

152～156は須恵器である。152は杯蓋、153は杯Bで、8世紀後半～9世紀前半のものである。154は双耳瓶の耳部破片である。9世紀のもの。155は蓋の底部で、外側に開く高台が付く。8世紀のもの。156は甕である。8世紀後半～9世紀前半のもの。

157は灰釉陶器の碗である。高台は低く幅広で、外面の稜も弱い。

158は彩釉陶器。瓶の肩部破片で、沈線がめぐる。外面はオリーブ黄色の釉がかかる。

159は白磁碗の体部破片である。内面に櫛目文を施す。

160は珠洲の擂鉢である。焼成はやや未還元で、卸目は9条以上ある。

161・162は越中瀬戸である。161は口縁部が端反り風になる皿で、内外面灰釉である。162は碗で、高台は浅く削り出される。内外面鐵釉で、高台周辺は錆釉を施す。

163・164は製塙土器である。バケツ形平底タイプの製塙土器で、外面には粘土紐痕と指頭圧痕が残る。

165は管状土錐である。樽型に分類される。

166は輪の羽口である。上端は還元化している。

167は鉄製の刀子である。関部の形状は両闇である。

(常深)

確認面

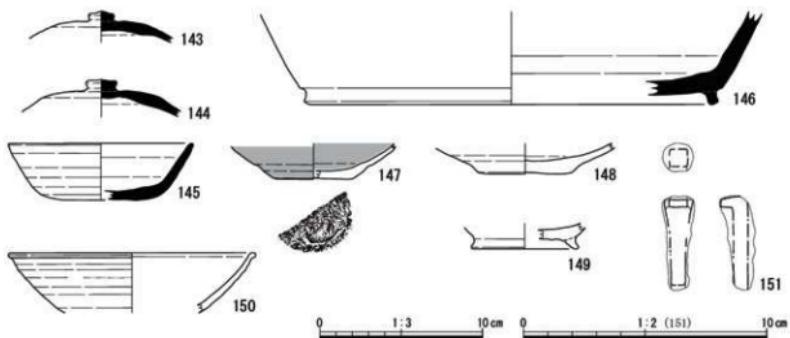


図21 確認面出土遺物

表土

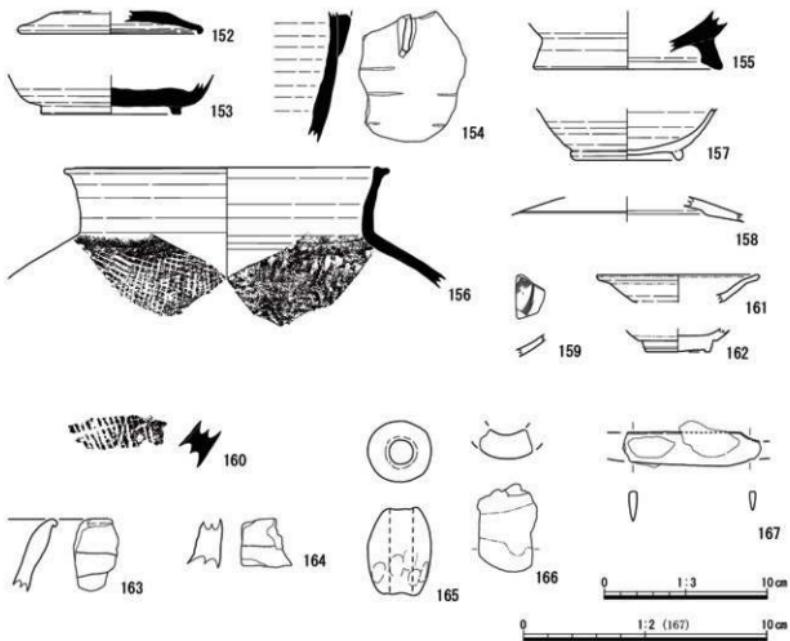


図22 表土出土遺物

表2 遺物観察表(1)

番号	出土遺構 層位	器種 類別	法 量(cm) (○)は推定値、(△)は残存値 (口径 (長さ) 底径 (幅) 器高 (厚さ)			色 調 (外顔)	胎 土	焼成	成・整形の特徴	備 考
			○	△	○					
1	試掘IT SD02	須恵器 蓋	(13.4)	-	(2.05)	N6/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形	
2	試掘IT SD01	須恵器 蓋	12.0	5.6	5.2	2.5V7/2 灰黄	普通	陶化失 気孔	ロクロ成形	内面に波線?の垂れた痕跡(波打 状?)、口縁部外間に重ね焼き痕
3	試掘IT SD01	土師器 碗	12.0	5.85	4.4	7.SYR8/4 浅黃	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部摩滅	
4	試掘IT SD01	土師器 碗	12.4	5.8	4.05	7.SYR8/3 浅黃	密、赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	
5	試掘IT SD01	土師器 碗	12.6	5.5	3.95	7.SYR8/4 浅黃	密、石英・骨針・赤 褐色粒	良好	ロクロ成形、底部左回転系切り	外面赤彩
6	試掘IT SD01	土師器 碗	12.9	6.15	4.25	SYR6/6 板	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	外面赤彩
7	試掘IT SD01	土師器 碗	(12.9)	(5.7)	4.25	7.SYR8/4 浅黃	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	外面赤彩
8	試掘IT SD01	土師器 碗	13.0	6.4	4.15	7.SYR7/4 にぶい 板	密、白色粒・赤褐色 粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	外面赤彩
9	試掘IT SD01	土師器 碗	(13.0)	(4.6)	4.65	7.SYR8/4 浅黃	密、白色粒・赤褐色 粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	
10	試掘IT SD01	土師器 碗	(13.0)	(5.8)	4.15	7.SYR7/6 板	密、石英・チャート・ 白色粒・赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	
11	試掘IT SD01	土師器 碗	(13.1)	(6.2)	4.25	10YR8/6 灰白	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	
12	試掘IT SD01	土師器 碗	(13.3)	(5.5)	4.3	7.SYR8/6 浅黃	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	口縁部外面二次被熱
13	試掘IT SD01	土師器 碗	(13.6)	(6.8)	5.25	7.SYR8/4 浅黃	密、白色粒・赤褐色 粒	良好	ロクロ成形、底部右回転系切り	外面赤彩?
14	試掘IT SD01	土師器 碗	14.4	6.2	4.85	7.SYR8/4 浅黃	密、石英・骨針・赤 褐色粒	良好	ロクロ成形、底部左回転系切り	外面赤彩
15	試掘IT SD01	土師器 碗	14.5	6.25	5.1	5YR7/4 にぶい 板	密、石英・骨針・赤 褐色粒	良好	ロクロ成形、底部左回転系切り	外面赤彩
16	試掘IT SD01	土師器 碗	-	6.15	(3.2)	5YR7/4 にぶい 板	密、石英・骨針・赤 褐色粒	良好	ロクロ成形、底部左回転系切り	内外赤彩、体部外面に付 着物あり
17	試掘IT SD01	土師器 碗	-	-	(1.75)	10YR7/3 にぶい 板	密、白色粒	良好	ロクロ成形	体部外面に墨書
18	試掘IT SD02	土師器 碗	(21.9)	-	(5.5)	10YR8/2 板	密、石英・骨針・白 色粒	良好	ロクロ成形、胴部外面カキモ リ	胴部外面と頸部内部に煤付 着
19	試掘	灰釉陶器 皿	(15.5)	-	(3.0)	2.5Y7/2 灰黄	微密	良好	ロクロ成形	灰釉重ね掛け、上軸はオ リーブ灰色
20	試掘IT	製塗土器	-	-	(1.95)	SYR6/6 板	やや密。石英・骨 針	良好	外面に粘土紐痕	
21	試掘	製塗土器	-	-	(8.75)	SYR6/6 板	粗、石英・骨針	普通	粘土紐痕ナデ痕。体部下端~底 部強い指添压痕、内面底部収り目	二次被熱、内面器面荒れる
22	SD01 (7区)	須恵器 蓋	(14.2)	-	(1.95)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形	
23	SD01 (7区近)	須恵器 蓋	(12.6)	-	(1.9)	SYR1/ 灰	密、石英・白色粒	良好	ロクロ成形	
24	SD01 (3区)	須恵器 蓋	(13.2)	-	(1.8)	N6/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
25	SD01 (5区)	須恵器 蓋	(13.0)	-	(1.95)	N5/0 灰	密、白色粒	普通	ロクロ成形	
26	SD01 (5区)	須恵器 蓋	(12.2)	-	(2.1)	2.SY6/1 灰黄	密、白色粒	良好	ロクロ成形	口縁部外面に重ね焼き痕
27	SD01 (8区)	須恵器 蓋A	12.4	9.7	3.55	7.SY7/1 灰白	密、白色粒	良好	ロクロ成形、底部へラ切り、内底 部ユビナゲ	
28	SD01 (7区)	須恵器 蓋B	(10.5)	(5.8)	4.1	N4/0 灰	密、白色粒・黒色 織出物	良好	ロクロ成形	外面に自然軸

表3 遺物観察表(2)

番号	出土遺構 層位	種器 類種	法量(cm) (○は推定値、△は残存値)			色調 (外側)	胎土	焼成	成・形の特徴	備考
			口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)					
29	S001 (3区)	須恵器 鉢B	(10.9)	(6.4)	4.0	N5.0 灰	密	良好	ロクロ成形	
30	S001 (7区底)	須恵器 鉢B	(13.5)	(7.7)	3.2	N6.0 灰	密, 石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部へラ切り、内底部ユビナデ	
31	S001 (3区)	須恵器 鉢B	-	(9.0)	(2.35)	5Y6.1 灰	密, 白色粒・赤褐色粒	普通	ロクロ成形	
32	S001(1区) 確認面	須恵器 鉢B	(14.2)	9.2	5.85	N6.0 灰	密, 白色粒	良好	ロクロ成形、底部へラ切り	口縁部外側に自然軸
33	S001(8区)	須恵器 皿	-	(6.0)	(1.05)	N6.0 灰	密	普通	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
34	S001 (9区)	須恵器 皿	-	-	(1.65)	7.5Y5.1 灰	密	良好	ロクロ成形、天井部外面回転へラケズリ後に沈線	
35	S001(5区) S001(5区底面)	須恵器 鉢A	(22.5)	-	(5.95)	N4.0 灰	密	普通	ロクロ成形	
36	S001 (5区)	須恵器 鉢A	(20.2)	-	(10.4)	2.5Y3.1 黒褐	密	良好	ロクロ成形	外側に自然軸
37	S001 (4区)	須恵器 皿	-	-	(3.15)	5Y7.1 灰白	密	普通	ロクロ成形、外側肩に沈線	
38	S001 (1区)	須恵器 皿	-	-	(5.85)	N6.0 灰	密	良好	ロクロ成形、脚部外側カキメ	頸部内面に墨痕あり
39	S001 (7区底)	須恵器 瓶	-	-	(5.3)	7.5Y5.1 密, 白色粒	良好	ロクロ成形、突帯より下位にタタキあり		
40	S001 (10区)	須恵器 瓶	-	-	(3.95)	N6.0 灰	密, 白色粒	良好	ロクロ成形、突帯より上位に沈線	
41	S001 (5区)	須恵器 皿	-	9.1	(14.15)	N5.0 灰	密	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り後にラケズリ、脚部上位と下位に沈線、脚部下部へラケズリ	
42	S001 (9区)	須恵器 皿	-	-	(2.45)	2.5Y5.1 灰	密	良好	ロクロ成形、口縁部外側に沈線と波状	
43	S001 (9区)	須恵器 皿	-	-	(4.85)	N5.0 灰	密	普通	ロクロ成形	
44	S001 (7区)	須恵器 皿	-	-	(5.55)	N4.0 灰	密	普通	ロクロ成形	
45	S001 (10区)	須恵器 皿	-	-	(6.35)	N5.0 灰	密	良好	頸部ロクロ成形、胴部タタキ成形	
46	S001 (5区)	須恵器 皿	-	-	(9.7)	7.5Y8.7/1 明褐	やや密, 白色粒	普通	頸部ロクロ成形、胴部タタキ成形	
47	S001 (5区)	土師器 碗	(12.7)	(5.0)	4.25	10Y8.7/3 にぶい黄褐	密, 石英・輝石	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	内面赤彩
48	S001 (7区)	土師器 碗	(12.8)	(5.4)	3.75	10Y8.7/3 にぶい黄褐	密, 石英・白色粒・赤褐色粒	普通	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
49	S001 (4区)	土師器 碗	(11.1)	-	(3.90)	5Y8.7/6 橙	密	良好	ロクロ成形	外側赤彩
50	S001 (5区)	土師器 碗	-	6.6	(2.85)	7.5Y8.7/4 にぶい黄褐	密, 石英・白色粒・赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
51	S001 (7区)	土師器 碗	-	6.4	(2.45)	5Y8.7/4 にぶい黄褐	密, 石英・白色粒・赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
52	S001 (1区)	土師器 碗	-	5.2	(1.5)	10Y8.7/2 にぶい黄褐	密	普通	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
53	S001 (1区)	土師器 碗	-	(5.8)	(1.6)	7.5Y8.7/6 橙	密, 石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
54	S001 (3区)	土師器 碗	-	(7.1)	(1.7)	7.5Y8.8/4 浅黄褐	密, 石英・白色粒	良好	ロクロ成形	
55	S001 (4区)	土師器 碗	-	(9.6)	(2.25)	10Y8.7/3 にぶい黄褐	密, 骨片・輝石	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
56	S001 (5区)	土師器 皿	(11.9)	(4.8)	2.25	7.5Y8.8/4 浅黄褐	密, 石英・白色粒・赤褐色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	

表4 遺物観察表(3)

番号	出土遺構 層位	器種 種類	法量(cm) ()は推定値、()は残存値 口径(長さ) 底径(幅) 器高(厚さ)			色調 (外面)	胎土	焼成	成・整形の特徴	備考	
			57	SD01 (7区底)	土器 甕	(12.6)	-	(6.45)	5YR7/4 にぶい橙	密、石英・白色粒	普通
58	SD01 (7区)	土器 甕	-	(7.6)	(4.45)	10YR5/2 灰黄褐	密	良好		外面に煤付着	
59	SD01 (4区)	土器 甕	(18.4)	-	(8.9)	10YR8/2 灰白	密、石英・白色粒	良好	ロクロ成形		
60	SD01 (8区)	土器 甕	(18.9)	-	(4.6)	7.5YR8/4 浅黄褐	密、石英	良好	ロクロ成形		
61	SD01 (1区)	土器 甕	(18.7)	-	(3.85)	7.5YR7/4 にぶい橙	密、石英・チャート	良好	ロクロ成形	外面に煤付着	
62	SD01 (7区底)	土器 甕	(18.2)	-	(3.2)	10YR7/3 にぶい黄褐	密	良好	ロクロ成形		
63	SD01 (7区)	死神陶器 瓶	-	(7.7)	(3.95)	10YR7/1 灰白	密、精良	良好	ロクロ成形	内部に重ね焼き痕	
64	SD01 (10区)	二彩陶器 瓶	(10.9)	-	(1.95)	10Y74/1 暗緑灰	硬(硬陶)	良好	ロクロ成形		
65	SD01 (8区)	死神陶器 大皿?	-	-	(1.0)	10Y6/2 オリーブ灰	密(軟陶)	良好	ロクロ成形		
66	SD01 (5区)	死神陶器 大皿?	-	-	(1.5)	10Y6/2 オリーブ灰	密(軟陶)	良好	ロクロ成形		
67	SD01 (5区)	死神陶器 手付水注	-	-	(3.85)	10Y5/2 オリーブ灰	密(軟陶)	良好	ロクロ成形		
68	SD01 (4区)	白磁 皿	(13.9)	-	(1.95)	10Y78/1 明緑灰	精良	良好	ロクロ成形		
69	SD01 (1区)	白磁 皿	(13.3)	-	(2.0)	10Y8/1 灰白	精良	良好	ロクロ成形		
70	SD01 (9区)	青磁 皿	-	-	(1.85)	10Y5/2 オリーブ灰	精良	良好	ロクロ成形、底部回転ヘラケズリ・ 乾ノ目輪剥ぎ	見込みに草花文?、割れ口 に研磨痕(軸用砥石?)	
71	SD01 (5区)	珠面 甕	-	-	(4.55)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	口縁部ナダ、胴部外面タタキ、胴部 内部當て其底		
72	SD01 (2区)	越中漬戸 皿	(10.0)	-	(2.2)	10R2/2 極暗赤褐	密、石英・黑色粒	良好	ロクロ成形	内部～体部外側鉄釉	
73	SD01 (5区)	越中漬戸 皿	-	(5.3)	(1.3)	2.5Y7/2 灰黄	密、石英・黑色粒	良好	ロクロ成形、底部削り出し高台、体 部内部に輪止めの段	体部内外側鉄釉	
74	SD01 (1区)	越中漬戸 皿	-	(5.7)	(1.65)	2.5YR6/4 にぶい橙	密、石英・黑色粒	良好	ロクロ成形、底部削り出し高台、体 部内部に輪止めの段	残存部分は無釉	
75	SD01 (7区底)	製塙土器	-	-	(2.3)	7.5YR6/6 橙	やや密、石英・白色粒	良好	外面に粘土細痕		
76	SD01 (7区底)	製塙土器	-	-	(3.25)	5YR6/6 橙	やや密、石英・骨灰・ 白色粒・赤褐色	良好	外面に粘土細痕と崩壊痕		
77	SD01 (10区)	製塙土器	-	-	(2.1)	10YR7/3 にぶい黄褐	やや密、石英・骨 灰	普通	内部指頭圧痕		
78	SD01 (7区)	土製品 土拂	長 6.4	幅 3.45	厚 3.2	2.5Y7/2 灰黄	密、石英・輝石	良好		孔径1.4cm、重さ63.45g.	
79	SD01 (5区)	木製品 薄板	長 10.3	幅 2.0	厚 0.5	-	-	-	下端が炭化する(火付け木か)		
80	SD01 (9区)	木製品 板	長 5.45	幅 3.85	厚 0.70	-	-	-	板状品の下部が炭化		
81	SD01 (5区)	木製品 板	長 10.35	幅 5.55	厚 0.70	-	-	-	一部に加工痕		
82	SD01 (6区)	木製品 曲物	長 12.6	幅 (8.75)	厚 0.75	-	-	-	上部に木釘孔2箇所(1箇所は未貫通)、裏面に漆付着		
83	SD06	須恵器 3H	-	(7.6)	(1.45)	N6/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形、内底部ユビナデ		
84	SD07	土器 甕	(12.2)	-	(2.8)	5YR6/6 橙	密、白色粒	良好	ロクロ成形		

表5 遺物観察表(4)

番号	出土遺構 層位	器種 類別	法 量(cm) (○は推定値、△は残存値 □は口径、△は底径、△は厚さ)			色 調 (外 面)	胎 土	焼成	成・整形の特徴	備 考
			口 径 (長 さ)	底 径 (幅 さ)	厚 さ					
85	SE34	土師器 碗	-	(4.0)	(1.7)	5YR6/6 根	密、石英・骨針・白 色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	外面赤彩
86	SE34	土師器 碗	-	(4.4)	(0.85)	2,5YR5/6 明赤陶	密、石英・骨針・白 色粒	良好	ロクロ成形、底部左回転糸切り	外面赤彩
87	SE34	土師器 碗	-	(5.6)	(2.15)	10YR8/2 灰白	密	良好	ロクロ成形、底部左回転糸切り	内面赤彩
88	SE82	須恵器 蓋	(11.7)	-	(1.25)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形	
89	SE82	須恵器 蓋	(12.0)	-	(1.65)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形	口縁部重ね焼き痕
90	SE82	須恵器 短束甌	(8.2)	-	(4.35)	N7/0 灰白	密、白色粒	良好	ロクロ成形	
91	SE82	土師器 碗	(14.2)	-	(2.7)	7,5YR8/6 浅黄褐	密、白色粒	良好	ロクロ成形	内面赤彩
92	SE82	土師器 碗	-	(5.7)	(1.55)	5YR7/4 にぶい根	密、石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部回転糸切り(摩耗)	
93	SE82	軟質陶器 鋤	(35.9)	-	(10.0)	7,5YR6/4 にぶい根	密、白色粒、赤褐色 色粒	普通	ロクロ成形、外表面下半ナデ	内外面二次被熱・焦げ付 着
94	SK23	須恵器 环B	-	(6.6)	(1.1)	N6/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
95	SK41	須恵器 蓋	(11.4)	-	(2.05)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形、天井部周縁回転ヘラケ アズリ	
96	SK50	須恵器 环B	-	(6.2)	(2.25)	N3/0 暗灰	密	良好	ロクロ成形	
97	SK85	土師器 碗	-	6.1	(2.25)	10YR8/2 灰白	密、石英・骨針・白 色粒	良好	ロクロ成形、底部左回転糸切り	内外面赤彩
98	SK90	土製品 埴輪	長 (6.5)	幅 4.35	厚 4.25	10YR7/3 にぶい黄褐	密、石英・輝石・白 色粒	良好	表面に指捺圧痕	孔径1.5cm、重3.95、88g。
99	SK92	須恵器 瓶	(14.9)	-	(1.8)	N4/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
100	SK93	土師器 环	(15.3)	-	(2.95)	10YR6/2 灰黄褐	密、石英	良好	ロクロ成形	
101	SK93	土師器 碗	-	(5.6)	(2.25)	7,5YR8/6 浅黄褐	密、石英・チャート・ 白色粒・赤褐色粒	普通	ロクロ成形、底部回転糸切り(摩耗)	
102	SK93	土師器 碗	-	(5.6)	(2.3)	10YR8/2 灰白	密、石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部回転糸切り	
103	SK93	土師器 碗	-	(5.3)	(1.7)	5YR7/4 にぶい根	密、石英・骨針	良好	ロクロ成形、底部左回転糸切り	
104	SK93	土師器 蓋?	-	(8.6)	(3.15)	5YR7/4 にぶい根	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	普通	ロクロ成形、底部回転糸切り(摩耗)	
105	SK94	土師器 碗	(13.4)	5.0	3.2	10YR8/3 浅黄褐	密、石英	良好	ロクロ成形、底部摩滅	内外面赤彩
106	SK94	土師器 碗	-	(5.0)	(0.85)	7,5YR6/3 にぶい根	密、石英	良好	ロクロ成形	
107	SK94	土師器 碗	-	5.2	(0.95)	2,5YR7/2 灰白	密、石英・輝石	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
108	SK94	土師器 甌?	(12.2)	-	(5.1)	10YR4/3 黒	密、石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形	外面に煤付着
109	SK94	土師器 甌?	-	(7.2)	(7.2)	10YR3/2 黒褐	密、石英・白色粒	普通	ロクロ成形、外表面下端～底部～ ラケアズリ	外面に煤付着
110	SK94	土師器 甌?	(14.2)	-	(3.6)	10YR5/2 灰黄褐	密	良好	ロクロ成形	外面に煤付着
111	SK94	土師器 甌?	-	(8.0)	(3.25)	10YR7/2 にぶい黄褐	密、石英・白色粒	良好	内外面ナデ	
112	SK94	縦輪陶器 碗	-	-	(2.8)	明緑	密(軟陶)	良好	ロクロ成形	

表6 遺物観察表(5)

番号	出土遺構 層位	種器 類種	法量(cm) (○は推定値、△は残存値 □口径 △底径 △厚さ)			色調 (外面)	胎土	焼成	成・整形の特徴	備考
			口径 (長さ)	底径 (幅)	厚さ					
113	SK95	土師器 碗	(11.8)	-	(2.95)	7.5YR7/4 にぶい・橙 色	密・白色粒・赤褐色	良好	ロクロ成形	
114	SK95	土師器 碗	(12.4)	-	(3.55)	10YR7/3 にぶい・黄褐色	密・石英・白色粒・ 赤褐色粒	良好	ロクロ成形	
115	SK100	土師器 碗	(12.8)	5.0	4.25	7.SYR8/4 浅黃褐色	密・石英・骨針・輝 石・白色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	内外面赤彩
116	SP03	土師器 碗	(12.7)	-	(3.35)	2.SYR7/6 板	やや密・赤褐色粒	良好	ロクロ成形	内外面赤彩
117	SP03	土師器 碗	(14.8)	-	(2.45)	10YR7/3 にぶい・黄褐色	密・白色粒	良好	ロクロ成形、内面ミガキ	内面黒色処理
118	SP05	須恵器 盤	(42.1)	-	(4.7)	SYR8/1 灰白	密・白色粒	普通	ロクロ成形	
119	SP07	須恵器 片	(12.2)	-	3.0	7.SYR7/1 灰白	密・白色粒	良好	ロクロ成形	
120	SP12	須恵器 蓋	(12.7)	-	(1.2)	S4/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
121	SP12	土師器 甕	(15.7)	-	(2.85)	7.SYR6/6 板	密	良好	ロクロ成形	
122	SP15	土師器 碗	-	(6.6)	(3.4)	7.SYR6/4 にぶい・橙	密・石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
123	SP15	土師器 碗	-	(7.4)	(1.25)	10YR7/4 にぶい・黄褐色	密・白色粒・赤褐色 粒	普通	ロクロ成形	
124	SP25	須恵器 片	(9.8)	-	(2.65)	S6/0 灰	密・白色粒	良好	ロクロ成形	内外面の一部に油煙付 着
125	SP25	土師器 碗	-	5.6	(1.35)	7.5YR7/3 にぶい・橙	密・石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
126	SP27	須恵器 片	(11.9)	-	(2.75)	2.SYR6/6 板	密	未選 元	ロクロ成形	
127	SP29	須恵器 盤	(37.5)	-	(9.35)	S6/0 灰	密・白色粒	良好	ロクロ成形、口縁部に波状文と沈線	
128	SP30	須恵器 片	-	(8.8)	(1.4)	SYR7/6 にぶい・橙	密・石英・白色粒	未選 元	ロクロ成形	
129	SP31	土師器 碗	-	(5.6)	(1.75)	SYR7/6 板	密・白色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	内面赤彩
130	SP31	土師器 碗	(13.5)	-	(2.05)	7.SYR7/4 にぶい・橙	密・白色粒・赤褐色 粒	良好	ロクロ成形	
131	SP35	須恵器 片	(12.4)	-	(3.15)	SYR8/1 灰白	密・白色粒	良好	ロクロ成形	
132	SP35	土師器 碗	-	(9.0)	(2.05)	2.SYR8/2 灰白	密・白色粒	普通	ロクロ成形	
133	SP36	鉄製品 刀子	(2.75)	幅 (0.95)	厚 0.4	-	-	-	-	重さ(4.04)g
134	SP60	土師器 甕	(15.1)	-	(2.15)	SYR7/6 板	密	良好	ロクロ成形	
135	SP75	須恵器 蓋	-	-	(1.55)	S6/0 灰	密・白色粒	良好	ロクロ成形	
136	SP78	土師器 皿	-	(8.0)	(2.15)	7.SYR7/4 にぶい・橙	密・石英・白色粒	良好	ロクロ成形	
137	SP81	土師器 碗	-	(4.6)	(1.2)	7.SYR8/3 浅黄褐色	密・白色粒・褐色 粒	良好	ロクロ成形	外面赤彩
138	SP87	土師器 碗	(10.8)	-	(2.2)	7.5YR7/4 にぶい・橙	密・石英・白色粒	良好	ロクロ成形	
139	SP87	土師器 甕	(17.5)	-	(1.85)	7.SYR8/4 浅黄褐色	やや密・石英	良好	ロクロ成形、内面カキメ	
140	SP89	土師器 碗	-	(7.0)	(2.45)	10YR6/2 灰黄褐色	密	普通	ロクロ成形	外面上部に煤付着

表7 遺物観察表(6)

番号	出土遺構 層位	器種 類種	法量(cm) (○は推定値、△は残存値 □口径 △底径 △厚さ)			色・調 (外面)	胎土	焼成	成・整形の特徴	備考
			口径 (長さ)	底径 (幅)	厚さ (高さ)					
141	SP103	須恵器 片	(12.5)	-	(3.05)	N6/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
142	SP107	土師器 碗	-	(6.2)	(1.6)	10YR6/2 灰黄褐	密、石英・白色粒	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
143	確認面	須恵器 蓋	横7.5 径 1.6	-	(1.9)	N6/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
144	確認面	須恵器 蓋	横5.5 径 1.9	-	(2.3)	5Y6/1 灰	密、石英	良好	ロクロ成形、天井部内面ユビナデ	
145	確認面	須恵器 片	(11.3)	-	3.5	5Y7/1 灰白	密、白色粒	良好	ロクロ成形、底部ヘラ切り	
146	確認面	須恵器 盤?	-	(25.5)	(5.7)	2.5Y8/1 灰白	密	良好	ロクロ成形	
147	確認面	土師器 碗	-	(4.9)	(2.2)	5Y6/4 にぶい橙	密、白色粒、赤褐色	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	内外面赤彩
148	確認面	土師器 碗	-	(4.8)	(1.85)	7.5YRS/4 淡黄褐	密、石英・白色粒、赤褐色	良好	ロクロ成形、底部回転糸切り	
149	確認面	土師器 碗B	-	(6.6)	(1.55)	10YR8/2 灰白	密、輝石	良好	ロクロ成形	
150	確認面	灰釉陶器 鏡	(15.0)	-	(3.7)	5Y7/1 灰白	密	良好	ロクロ成形	内面と口縁部外間に灰釉
151	確認面	鉄製品 針	長 (3.8)	幅 1.15	厚 0.6	-	-	-	-	重さ(7.08g)
152	表土	須恵器 蓋	(11.0)	-	(1.4)	N6/0 灰	密	良好	ロクロ成形、天井部内面ユビナデ	口縁部内面に重ね焼き痕
153	表土	須恵器 片B	-	8.6	(2.40)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形、底部ヘラ切り	
154	表土	須恵器 双耳瓶	-	-	(7.95)	N4/0 灰	密、白色粒	良好	ロクロ成形	
155	表土 (北)	須恵器 蓋	-	(11.4)	(3.55)	N6/0 灰	密	良好	ロクロ成形	
156	表土	須恵器 盤?	(19.8)	-	(6.3)	N7/0 灰白	普通	ロクロ成形、脚部外側タタキ、脚部内面に当て具痕とナデ		外面に陥凹
157	表土 (南)	灰釉陶器 碗	-	(6.9)	(3.15)	N7/0 灰白	密、精良	良好	ロクロ成形、底部右回転糸切り	
158	表土	彩釉陶器 瓶?	-	-	(1.55)	5Y6/3 オリーブ黄	密	良好	ロクロ成形、肩部に沈線	中世?灰釉?
159	表土	白磁 瓶	-	-	(1.35)	2.5GY8/1 灰白	密	良好	ロクロ成形	内面に横目文
160	表土	珠形 擂鉢	-	-	(2.85)	7.5YR8/2 灰白	密、石英・白色粒 やや 未発光	良好	ロクロ成形	擂目は9条以上
161	表土	越中焼 片	(9.8)	-	(1.7)	5YR6/2 灰褐	密、石英	良好	ロクロ成形	内外面灰釉
162	表土	越中焼 片	-	(3.9)	(1.45)	7.5YR2/2 黒褐	密	良好	ロクロ成形、底部削り出し高台	内外面鐵釉、高台周辺は 錆斑
163	表土 (南)	製塙土器	-	-	(4.45)	7.5YR6/6 橙	やや密、白色粒	良好	外面に粘土細痕と指痕压痕	
164	表土	製塙土器	-	-	(3.0)	5YR6/6 橙	やや密、白色粒	良好	外面に粘土細痕と指痕压痕	
165	表土	土製品 土拂	長 5.4	幅 3.9	厚 3.75	10YR7/3 にぶい黃褐	密、石英・白色粒	良好	表面に指痕压痕	孔径1.4cm、重さ64.00g
166	表土 (北)	土製品 羽口	長 (5.4)	-	-	7.5YR7/4 にぶい橙	やや密、石英・白色粒	良好	-	上部還元炎、下部酸化炎
167	表土	鉄製品 刀子	長 (5.65)	幅 1.4	厚 0.3	-	-	-	-	重き(11.33)g

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

はじめに

黒崎種田遺跡は、富山県富山市黒崎字種田割に所在し、常願寺川扇端付近に位置すると同時に、神通川・熊野川の扇状地帯にも含まれる複合扇状地に立地する。発掘調査の結果では、古代の遺構が確認されており、自然流路の周辺に土坑、井戸、ピットなどが検出されている。

本報告では、自然流路とそれに切られる土坑試料を対象に、形成ないし埋没時期に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。

1 試料

試料は、自然流路 NR01 と、それに切られる土坑 SK95 から、それぞれ 1 点ずつ採取されている。試料はフィルムケースで採取されており、その中から炭化材（細片）を探取し、分析試料とした。

2 分析方法

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理：AAA）。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma: 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach, 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正用に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al., 2020) である。

3 結果

結果を表 8、図 23 に示す。試料の測定年代（補正年代）は、自然流路 NR01 が $495 \pm 20\text{yrBP}$ 、土坑 SK95 が $1,105 \pm 20\text{yrBP}$ の値を示す。

曆年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の

宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を校正することによって、曆年代に近づける手法である。曆年校正年代は、測定誤差を2σとして計算させた結果、NR01がcalAD 1,409～1,444、SK95がcalAD 892～994である。

表8 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年校正用	曆年校正年代						Code No.
						年代値			標準偏差			
NR01	炭化木(樹皮)	AaA	495±20	-31.16±0.26	495±20	σ cal AD 1419 - cal AD 1438	531	-	512	512	68.3	pal-YU-140101 IS466
SK95	炭化木(樹皮)	AaA	1105±20	-27.53±0.33	1103±20	2σ cal AD 1409 - cal AD 1444	542	-	506	507	95.4	pal-YU-140111 IS466

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,580年を使用。

2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4)AAAは酸-アルカリ一級処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

5)曆年の計算には、OxCal4.4を使用。

6)曆年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7)折目を丸めるのが慣例だが、曆年校正曲線や曆年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を留めていない。

8)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

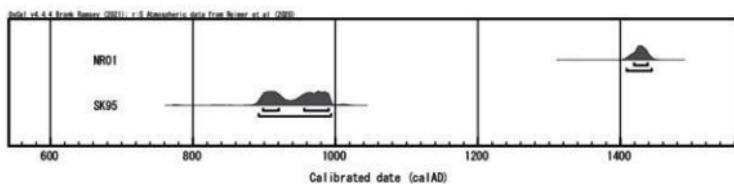


図23 曆年較正結果

4 考察

年代測定の結果、土坑SK95は補正年代で $1,105 \pm 20$ yrBP、曆年代でcalAD 892～994の値を示した。この土坑を切って形成されている自然流路NR01は、補正年代で 495 ± 20 yrBP、曆年代でcalAD 1,409～1,444の値を示し、SK95との切合関係とも矛盾しない。

以上のことから、SK95は9世紀末～10世紀末、NR01は15世紀前半までに埋没した構造の可能性が指摘される。

引用文献

- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337–360.
 Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon J., Turney C., Wacker L., Adolphi F., Buentgen U., Capone M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1–33.
 Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ¹⁴C Data. Radiocarbon, 19, 355–363.

第5章 総括

今回の発掘調査で検出された古代の遺構は、調査区を斜行する自然流路 NR01 と、その両岸に分布する溝、井戸跡、土坑、ピットである。調査面積が限られていたため建物跡は把握できなかつたが、柱穴状のピットが多く存在することから、掘立柱建物が存在した可能性は十分に考えられる。遺構の分布状況や NR01 内の遺物出土状況からすれば、調査区周辺に関しては NR01 の南側に建物跡が存在することが想定される。

黒崎種田遺跡では、平成 17 年度調査において 8 世紀中頃の堅穴建物 SI1 と、それより新しいとされる大溝 SD6 が検出されている。SD6 は 9 世紀後半から埋没が進んだとされる（富山市教委 2005）。SD6 は幅約 4.0 m、深さ 82 cm の規模である。南東から北西へ流れ、その北西側延長は本調査区の NR01 に重なる（図 24）。NR01 は 8 世紀後半の遺物が混入するものの、下層遺物は 9 世紀後半が大部分を占め、SD6 と時期が一致する。NR01 及び SD6 は、9 世紀後半から埋没が始まる同一の流路と判断される。

NR01 の 2 ~ 5 区の南岸は、流路の蛇行により折れ曲がり、約 5 m 四方の空間が生じている。この空間には、試掘 1T において赤彩品を多く含む土師器碗を集中出土した遺構や、同じく赤彩の土師器碗を出土した SK85・100 が存在する。NR01 の 5 区遺物集中地点もこの空間に面し、南西側から遺物が流れ込んだ状況を示している。いずれも 9 世紀後半の遺物で、平成 17 年度 SD6 の出土遺物と同時期である。しかし SD6 は多くの土師器碗が出土しながらも、赤彩は確認されなかつたと報告されている。今回の調査区の遺物は、SD6 の出土遺物と比較したときに、土師器碗に占める赤彩率の高さ、二彩陶器・緑釉陶器、製塙土器の出土が特筆される。

古代の流路や溝では、流れの変化する地点において祭祀などに伴つて遺物が大量に出土する事例がみられる。本遺跡に近い任海宮田遺跡（富山県財团 2008）では、C20 地区の古代溝 SD01（9 世紀中頃～10 世紀初）が屈曲する地点で遺物が大量に出土した。その組成は供膳具の比率が高く、須恵器・土師器・黒色土器・墨書き土器が出土したほか、赤彩土師器・緑釉陶器・製塙土器については C 地区内の大部分が同所周辺から出土し、それぞれ C 地区全体出土量の 50%・82%・75% を占める。これらの遺物は同遺跡の中核的な位置を占める B1・B6 地区でも多く出土しているが、C20 地区では B1・B6 地区で多数出土した灰釉陶器の供膳具が組成しないことが注意される。

また射水市赤田 I 遺跡では、9 世紀後半頃の溝状遺構 SD01 の屈曲点にあたる 3 区に堰状遺構が設けられ、周辺から供膳具、斎串や人形などの木製祭祀具が多量に出土した（小杉町教委 2003）。供膳具は須恵器・土師器（赤彩含む）・黒色土器・墨書き土器・緑釉陶器がある。灰釉陶器の出土は報告されていない。

この 2 例は 9 世紀後半頃の水辺の祭祀遺構と認識される。流路や溝の流れが変化する場所は、何らかの空間として意識され、祭祀が執り行われることがあったと考えられる。そこで祭祀は、祭祀の内容や規模によって祭祀遺物の組成や量が異なることが想定される。木製祭祀具は祭祀遺構の判断において最も分かりやすいものであるが、土器に関しては赤彩の土師器碗・皿、黒色土器、油煙土器、緑釉陶器、製塙土器の存在が指標になり、灰釉陶器や土師器煮炊具は出土しない傾向にある。本遺跡の事例は、流路の流れが変化する地点であること、その周辺から赤彩の土師器碗、二彩陶器・緑釉陶器、製塙土器が出土していること、土師器甕や灰釉陶器が少ないことが共通しており、任海宮田遺跡や赤田 I 遺跡と同様に水辺の祭祀が執り行われる場であった可能性が考えられる。ただし、本遺跡では現状では木製祭祀具が確認されず、黒色土器・油煙土器もわずかであったことから、祭祀の規模は

質・量ともに小さいものであった。祭祀遺物の組成は赤彩の土師器碗が主体となっており、なかでも試掘 1T や SK85 などで出土した土師器碗（5・14・15・97）は、法量も大きく、内湾気味の口縁形状、底部左回転系切り、内外面の赤彩、海綿骨針を含む胎土などの特徴が際立っており、土師器碗の中心的な位置を占める。他の土師器碗とは明らかに異なっており、同一の製作者の手によるものとみられる。おそらく祭祀に使用する目的で製作されたのものであろう。管見では黒崎種田遺跡や近隣の黒瀬大屋遺跡（富山市教委 2018）、友杉遺跡（富山県財団 2010）、任海宮田遺跡から同タイプの土師器碗は出土していない。熊野川流域で同時期の遺跡を調査する際には留意しておきたい遺物である。また NR01 から出土した平底で徳利形の須恵器壺（41）は、栗山楮原遺跡（富山県埋文 1990）や任海宮田遺跡（C16 地区包含層）のほか、前述の赤田 I 遺跡 SD01 からも同形のものが出土しており、祭祀との関連も窺われる。製塩土器は、棒状尖底とバケツ形平底の二種が出土している。任海宮田遺跡や友杉遺跡の同時期の製塩土器はすべて棒状尖底であるが、10 世紀の資料を含む朝菜町鳥ノ木遺跡（富山市教委 2014）ではすべてバケツ形平底である。これは熊野川の右岸・左岸の地域差、集落の時期差、塩の用途の違い等に起因すると想定されるが、本遺跡は両者の中間的な状況を示している。

本遺跡の位置する熊野川流域では、8 世紀後半以降に各遺跡で集落形成が本格化する。黒崎種田遺跡は遺跡南部では古代遺構が希薄で、今回の調査区を含む遺跡北部から隣接する黒瀬大屋遺跡にかけ

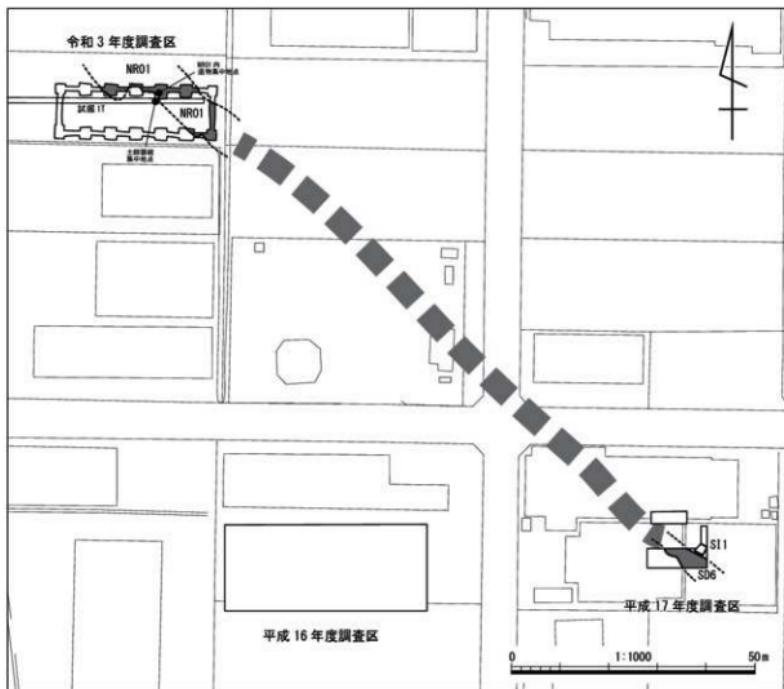


図 24 NR01 及び平成 17 年度調査 SD6

て古代集落が広がる。平成 17 年度調査区では 8 世紀中頃～後半の竪穴建物跡や溝と重複して SD6 が形成されていることから、SD6 の形成は 9 世紀前半頃と考えられる。これに関連して、黒瀬地区の試掘調査等で熊野川がたびたび洪水を起こしていたことが明らかになっている。また黒崎種田遺跡の令和元年度調査（図 1）においても、時期が中世に下るが、洪水による河川流路の形成が想定されており、水の影響を受けやすい地域であったことが分かる（富山市教委 2020）。同様に NR01 及び SD6 も、9 世紀前半頃に洪水等の発生に起因して形成された流路である可能性が考えられる。隣接する黒瀬大屋遺跡や上野井田遺跡（富山市教委 2021）では 9 世紀前半の建物跡が確認されるのに対し、黒崎種田遺跡では同時期の遺構が少ないことも、洪水や氾濫が影響したものと考えられる。その後、9 世紀後半になって遺構・遺物が再び現れる。このような経緯からすれば、NR01 の蛇行部分でみられた祭祀遺物の出土状況は、流路を対象とした水辺の祭祀であったことを想定させるものである。黒瀬大屋遺跡では、令和 3 年度の試掘において、旧流路 SD01 から 8 世紀後半～9 世紀前半の土器とともに馬形の木製品が出土している（堀内 2022）。黒瀬大屋遺跡は本遺跡と南北に連続した立地にあり、平成 29 年度調査では縁袖陶器が出土するなど、本遺跡との関係性が深く、今後の調査の進展によっては官衙的施設の検出が想定されるところである。

NR01 は中世になても存続している。覆土の上層からは白磁、青磁、珠洲、越中瀬戸が少量ながら出土しており、上層に相当する 2 層出土炭化物の放射性炭素年代測定は 15 世紀前半を示している。今回は中世の遺構は検出していないが、NR01 は 15 世紀までは確実に存在し、最終埋没は近世まで下ると考えられる。平成 17 年度 SD6 の西に隣接する平成 16 年度調査では、12～13 世紀の掘立柱建物跡や竪穴状土坑、井戸跡を検出しておらず、流路沿いに中世の遺構が存在したことが分かる。流路の上流にあたる南東側を辿ると、13～15 世紀の屋敷跡を検出した令和元年度調査区があり、その南には県内最大級の館跡とされる鰐川館跡がある。鰐川館跡は熊野川や土川などの河川合流点を抑え、内水面交通を掌握する位置にあった（鹿島 2021）。令和元年度調査では調査区の南から西にかけて中世の河川流路の存在が指摘されている。中近世段階の NR01 がその河川流路と繋がることが今後明らかになれば、平成 16 年度調査の中世遺構や本調査の中世遺物も、鰐川館跡との関連で捉えられることになるであろう。

(常深)

引用・参考文献

- 鹿島昌也 2021 「遺跡からみた鰐川館の成立－宮道・鰐川氏の拠点を辿って」『富山市の遺跡物語 No. 22』
 北日本新聞社
 1994 「熊野川」『富山大百科事典』
 富山県小杉町教育委員会 2003 『赤田 I 遺跡発掘調査報告』
 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2006 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』
 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2008 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』
 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2010 『友杉遺跡発掘調査報告』
 富山県埋蔵文化財センター 1994 「栗山猪原遺跡 南中 A 遺跡 任海鎌倉遺跡 南中 C 遺跡」
 富山市教育委員会 1998 『富山県富山市 上野井田遺跡』
 富山市教育委員会 2000 『富山上に新保遺跡発掘調査報告書』
 富山市教育委員会 2002 『富山市吉岡遺跡、絆ヶ遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 122
 富山市教育委員会 2005 『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 2
 富山市教育委員会 2009a 『富山上に新保遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 30
 富山市教育委員会 2009b 『富山上に新保遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 37
 富山市教育委員会 2014 『富山市朝菜町鳥ノ木遺跡』富山市埋蔵文化財調査報告 65
 富山市教育委員会 2015a 『富山市千石町遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 78
 富山市教育委員会 2015b 『富山市千石町遺跡発掘調査報告書 写真図版編』富山市埋蔵文化財調査報告 78-2
 富山市教育委員会 2018 『富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 94
 富山市教育委員会 2020 『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 101
 富山市教育委員会 2021 『富山上に上野井田遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告 104
 堀内大介 2022 「黒瀬大屋遺跡出土の馬形」『富山市の遺跡物語 No. 23』



調査地区全景（遺構検出、空撮、西から）



調査地区全景（完掘、空撮、東から）

写真図版 2
遺構(2)



調査地区東側全景（南西から）



調査地区西側全景（南東から）



NR01 完掘（北西から）



NR01 完掘（北東から）

写真図版 4
遺構(4)



NR01 完掘（北東から）



NR01 碓出土状況（北東から）



SE34 上層（南西から）



SE34 完掘（南から）



SE82 上層（北から）



SE82 石組（北から）



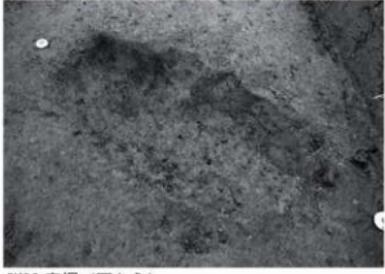
SE82 掘り方（南から）



SK85（北西から）



SK33 検出状況（東から）



SK33 完掘（西から）

写真図版
6
遺構
(6)



SD59 完掘（北西から）



SD83 完掘（東から）



SD86 完掘（東から）



SD91 完掘（南から）



SD96 完掘（南から）



SD97 完掘（北から）



SP29 遺物出土状況（南から）



SK100 遺物出土状況（北から）



2



3



4



5



6



7



8



12

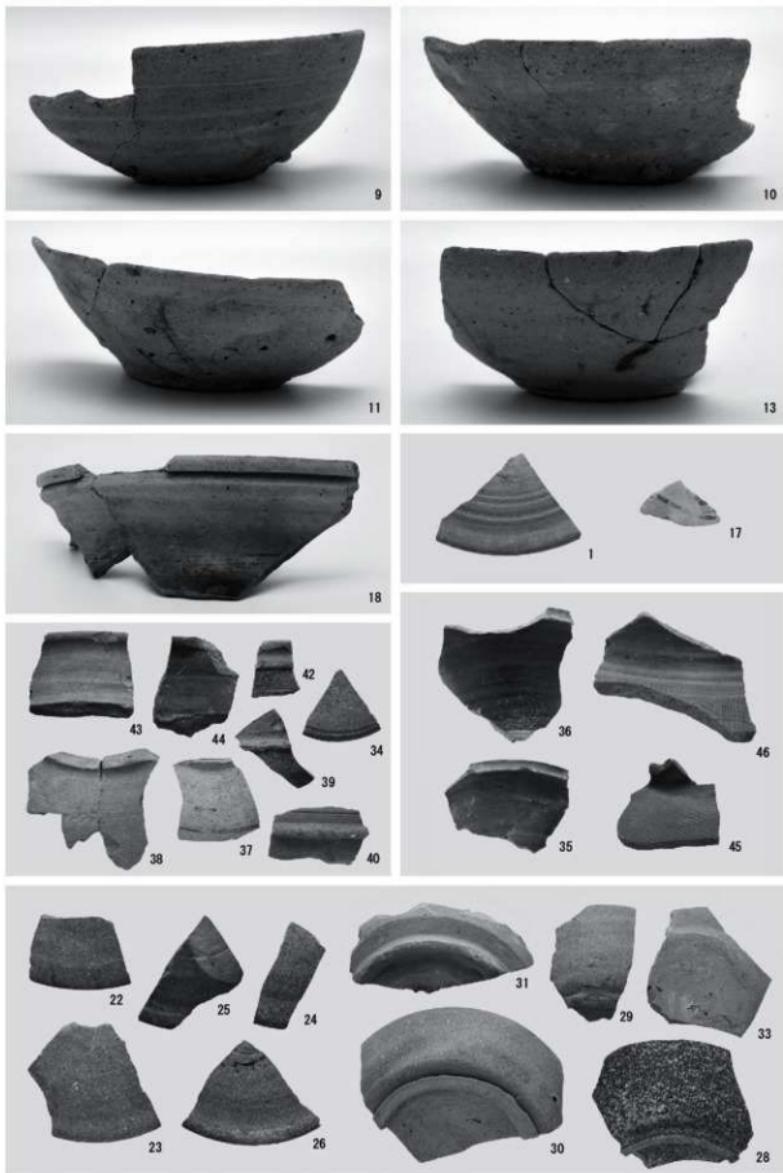


14



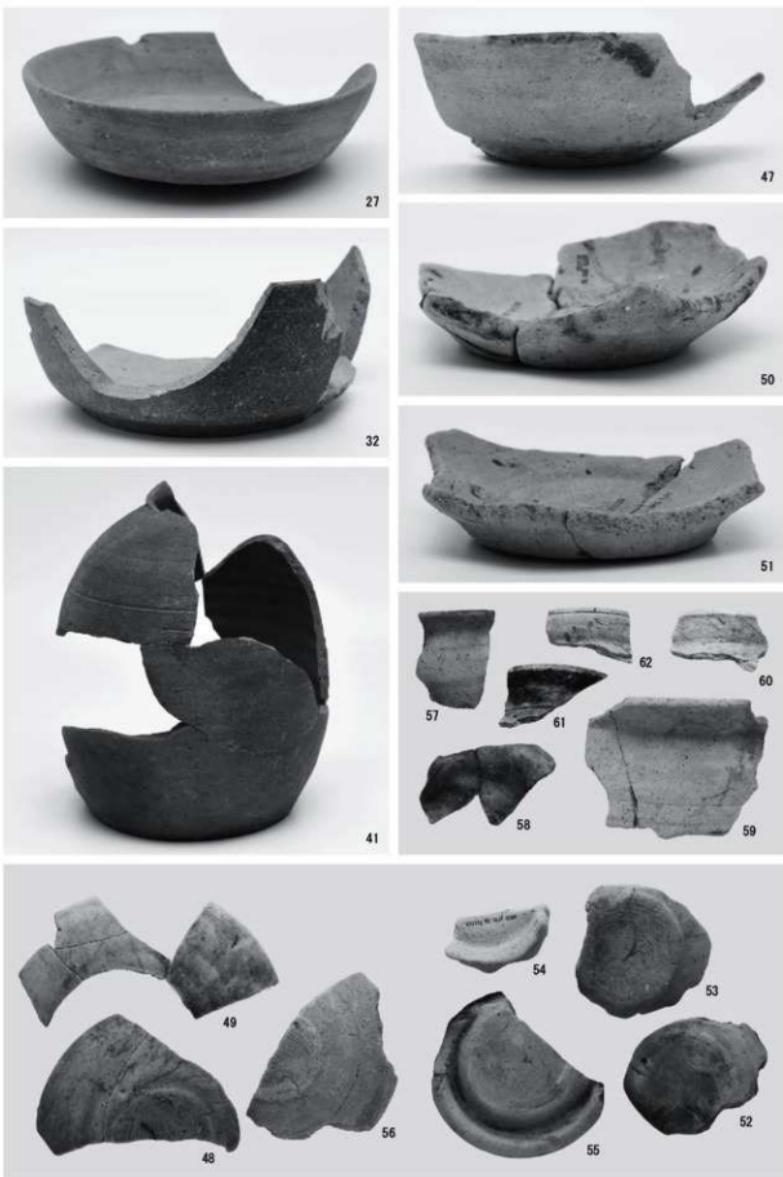
15

写真図版 8
遺物(2)

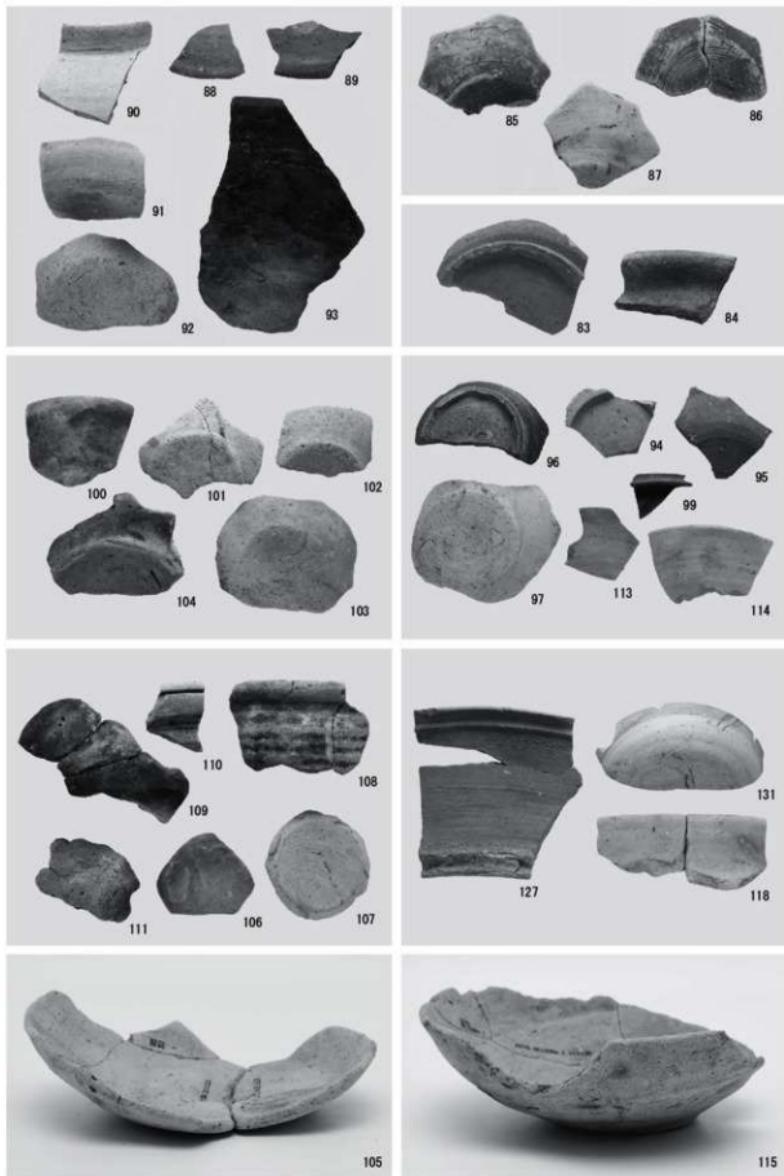


試掘調査出土遺物、NR01 出土遺物

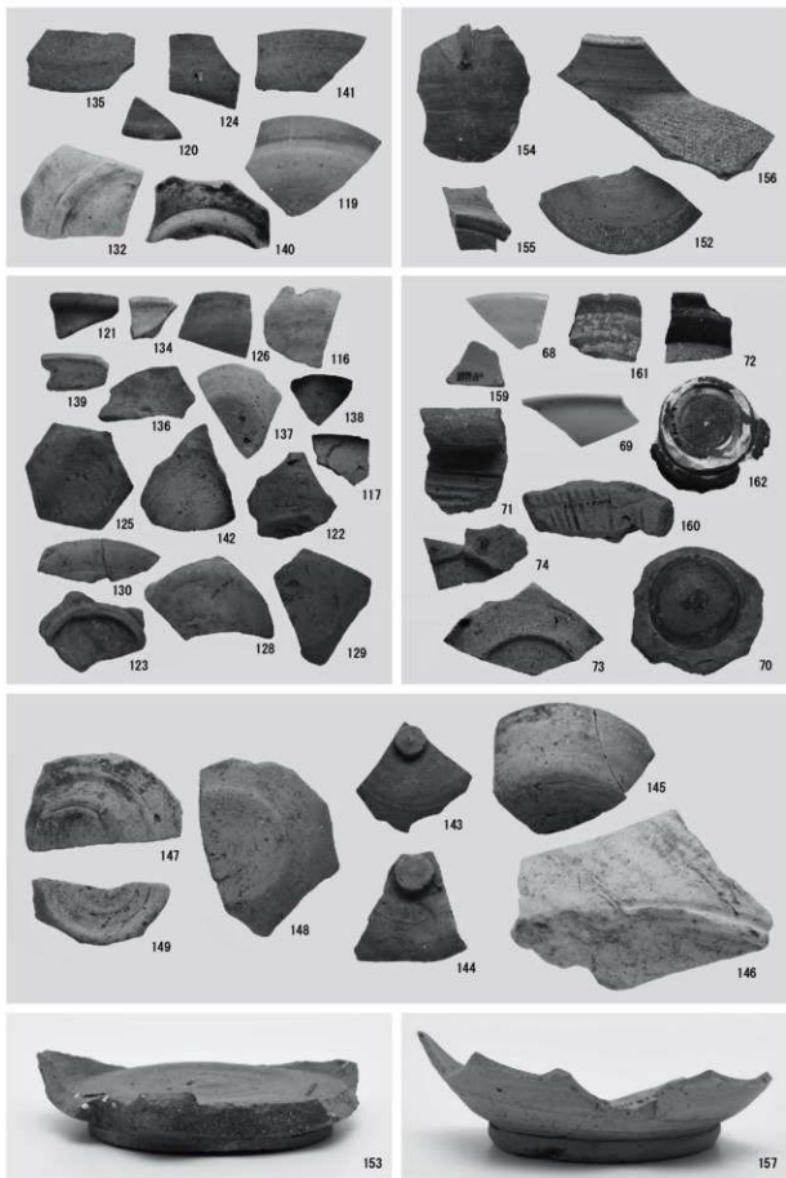
写真図版 9
遺物(3)



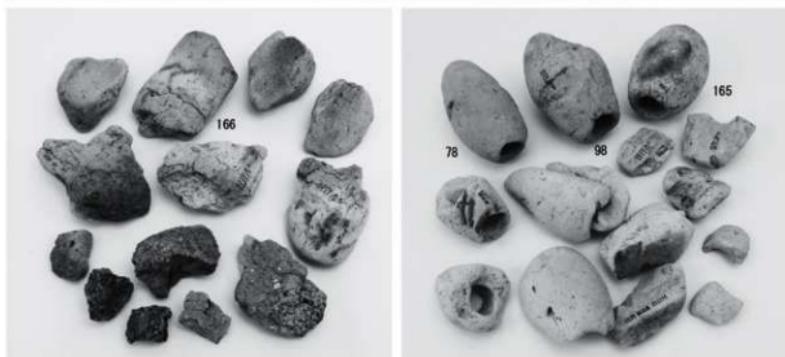
NR01 出土遺物



SE34・82 出土遺物、SD86・97 出土遺物、SK23・41・50・85・92・93・94・95・100 出土遺物
SP05・29・35 出土遺物



NR01 出土遺物、SP03・07・12・15・25・30・31・35・60・75・78・81・87・89・103・170 出土遺物
確認面出土遺物、表土出土遺物



製塙土器・糞羽口・土錘・木製品・金属製品

報告書抄録

富山市埋蔵文化財調査報告 108

富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書

— 貸倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2022（令和4）年6月30日発行

発 行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒939-2798

富山県富山市婦中町速星 754 番地
(婦中行政サービスセンター本館 3階)

Tel 076-465-2146

Fax 076-465-5032

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

編 集 有限会社毛野考古学研究所 富山支所

〒939-0351

富山県射水市戸破1679-3-A

Tel 0766-57-1618

印 刷 株式会社中村